第Ⅱ部　『昔話集』に秘められた「神話」的なもの

昔話の中には、失われてしまったものとみなされている、生粋のドイツの神話があるのです（『昔話集』初版序文, Grimm 1986 Bd. 2 S. VIIf.)。

第1章　「神話」の残滓としての『昔話集』 63

第1節　古代ゲルマンとのつながり ... 68
第2節　中世叙事詩とのつながり 78
第3節　16世紀の文学とのつながり .. 86
第4節　民衆本とのつながり 96

第2章　インド・ヨーロッパ圏とのつながり 100

第1節 古代ギリシア 102
第2節　インド 105
第3節　ペルシア 110
第4節 インド・ヨーロッパ以外の伝承について 114
補足　グリムの神話観とその後の研究 116

第3章　書きかえられていないものを「神話」から考える 118

第1節　道徳に関して 121
第2節　性に関して 125
第3節　愛情に関して 125
第4節　残酷さに関して 128

ブレーメンの音楽隊

第１章　「神話」の残滓としての『昔話集』

第Ｉ部を受けて本章では、グリム兄弟が昔話のどのようなところに「神話」を見出していたのかということを、『昔話集 注釈篇』や『神話学』[1]の記述を参考にしながら、詳しく考察していく。なぜなら、これまでのグリム『昔話集』研究においては注釈におけるグリム兄弟の指摘が幾つか紹介されることはあっても、指摘されたものがどのような「神話」で、昔話とはどの程度類似しているのかということが具体的に指摘されてはこなかったからである。

北欧とは異なり、ドイツには『エッダ』やサガ (第１節 2. 参照) のようなものが残されていないため、ヤーコプは『神話学』において、中世に書かれた詩、人名、地名、中でも自ら収集した昔話と伝説をその典拠とし、『エッダ』など各地の神話と対比させる形で、ドイツにもかつて存在していたはずの神話の再構築を試みている。ヤーコプは『神話学』初版の序文の中で、「全ての伝説 (昔話を含む) の根底には神話がある、すなわち神々への信仰である」(Grimm 1965a Bd. 8 S. 148) と述べているが、ヤーコプは、「昔話、伝説、迷信、風習など、全ての民俗学的なマテリアルの中に、異教の信仰に基づく伝承が残されていると信じて疑わなかった」のである (Paul 1985 S. 81)。同様の立場から『昔話集 注釈篇』も編纂されているため、ここで「神話」的なものとして扱うものには、中世の叙事詩や民衆本なども含められてくることをあらかじめ指摘しておく。

さて、昔話と神話の関係に対するグリム兄弟の具体的な見解が、『昔話集』初版第２巻の序文に示されているため、とりあえずはそれから見ていきたい。

> これらの昔話の内に保持されている価値は、現実に高く評価されるべきものなのです。[...] 錘に刺されて眠りにおちる**いばら姫**は、いばらによって眠らされた**ブリュンヒルド**です。ニーベルンゲンに出てくるブリュンヒルドではなく、古代北欧のブリュンヒルドなのです。**白雪姫**は、Snäfridr と同じ様に、生きているかのような赤い顔色をしたままで眠るのです。Snäfridr は、女の中で最も美しい女性で、彼女の棺のそばにハラルド美髪王は 3 年間座り続けます。忠実な小人たちと同じ様に、死にながら生きつづける乙女を見張り見守りながら。白雪姫の口の中にあるりんごの芯は、眠りの実[2]です。金の鳥が金の羽根を落とし、そのため王があらゆるところに使いを出す話がありますが、これはトリスタンの中のマルク王の話に他なりません。その話では、鳥が運

---

[1] ヤーコプの『神話学』は、初版が 1835 年、第２版が 1844 年、第３版が 1854 年に刊行された。本論で引用に用いているのは、マイヤー (Elard Hugo Meyer) 編による 1876 年第４版 (リプリント版, J. Grimm 1992) である。ヤーコプが直接著したのは２巻だが、さらなる改訂のためにヤーコプが著者保存版に書き込んでおいたメモを、マイヤーがまとめて、『神話学』の第３巻として刊行している (J. Grimm 1992 Bd. 3)。マイヤー版には、序文は第２版のものが掲載されている (第３版の序文は５行のみの、補足説明であるため)。

[2] 原文では Schlafkunz oder Schlafapfel。これに関しては『神話学』にも指摘がある。「いばら (Dornrose) は、ここでは意義深い。なぜなら、野いばらやさんざしのやぶに出来る苔状のこぶのことを、今日でも schlafapfel か schlafkunz と呼ぶからである。つまり、いばら (Dornrose) は名前自体に神話とのつながりを持っているのである」(J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 1007f.)。

んできた王女の金髪によって、マルク王が憧れを感じています。ロキが大鷲にくっついて離れられなくなってしまうところは、**金のがちょうの話**を通してみると、私たちはより良く理解出来るのです。手を触れた乙女や男たちが離れられなくなってしまうあのがちょうの話です。[...] **これら民衆の昔話の中には、失われてしまったものとみなされている、生粋のドイツの神話があるのです** (Grimm 1986 Bd. 2 S. VIf.)。(引用文中のゴシック部は西口による。以下同様)。

まずはこの序文に沿って、グリム兄弟が具体的に昔話と結びつけていた神話がどのようなものであるのかを見ていこう。

最初に言及されている「いばら姫」(KHM 050) だが、呪いをかけられたいばら姫は、15歳の時に錘に刺され、城ごと100年の眠りについてしまう。この城はいばらにすっぽりと覆われる。そして美しいいばら姫を得ようとしてやって来る王子はみな、いばらに引っ掛かって命を落としてしまう。しかしちょうど100年が過ぎた時にやって来た王子の前では、いばらは花を咲かせ、王子のために道を開けるのである。

この、錘に刺されて100年の眠りにおちるいばら姫が、北欧のブリュンヒルドであるという指摘は、同様に『昔話集 注釈篇』(第3巻) と『神話学』にも見られる[1]。

ブリュンヒルドは、北欧神話では最高神かつ軍神であるオーディンに仕えるヴァルキューレのひとりである。ヴァルキューレとは、オーディンが戦に遣わし、勝利者と戦死者を決定させる者のことである。グリム兄弟が指摘している「眠りの茨」は、有名なサガのひとつである『ヴォルスンガサガ』[2]では、次のように歌われている。

ブリュンヒルドは二人の王が戦った、と話した。一人はヒャールムグンナルという。彼は老齢だが、すぐれた勇士で、オーディンは彼に勝利を約束した。もう一人はアグナルまたはアウザブロージルといった。

「わたしは戦いでヒャールムグンナルを倒しました。その仕返しにオーディンはわたしを**眠りの茨**で刺し、今後勝利を得ることはかなわぬ、といい、結婚するようにと申し渡しました。それに対してわたしは恐れを知る人とは結婚しないという誓いを立てました」(谷口 1979 S. 562)。

ブリュンヒルドはオーディンの意向に沿わず、アグナル (アウザブロージル) に勝利を与えたため、オーディンの怒りを買い、眠りの茨で指されて眠りにおちたのである。この

---

[1] 「定められた王子——その王子の前ではいばらの方がよけてくれる——が解放してくれるまで、いばらの壁に囲まれた城の中で眠る乙女は、古代北欧のサガにおける眠るブリュンヒルドである。ブリュンヒルドは炎の壁に囲まれており、その壁も、ただシグルズだけが通り抜けることが出来るのだ。そして彼が彼女を目覚めさせる。そしていばら姫を刺して眠りに陥らせる錘は、オーディンがブリュンヒルドに刺す眠りの茨なのである」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 97)。また『神話学』(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 347, Bd. 2 S. 1007) を参照のこと。

[2] これは、ヴォルスングの一族を扱ったサガで、『エッダ』に欠落する部分を補ってくれるものである。ワーグナーはこれを読んで「ワルキューレ」を書いた (谷口 1976 S. 98, 218ff.)。また内容的には『ニーベルンゲンの歌』の比較資料ともなるものである。

ことは他の幾つかの北欧の伝承の中でも歌われているので[1]、今度は「ブリュンヒルドの冥府への旅」の該当部分を見てみたい。

> オーディンは、わたしを赤と白の楯で隙間なく囲まれたスカタルンド (王侯の森) に閉じこめ、**恐れを知らぬ勇士だけが、わたしの眠りを覚ませることにした。**
> オーディンはわたしの館の南に**樹の敵 (火)[2]を炎々と燃え上らせ**、ファーヴニルの下にある黄金をわたしのところにもたらす勇士だけが、そこを馬で越せるようにしたのだ (谷口 1973 S. 163)。

その勇士というのが、シグルズである。このように、長期間眠りにつく女性、その女性の目を覚ますことが出来るのは定められたひとりの男だけであるというところに、グリム兄弟はつながりを見出していたのである。

さて、グリム兄弟が次に指摘しているのは、「白雪姫」(KHM 053) である。毒りんごを食べた白雪姫は死んでしまうが、生きているかのように赤みをおびた頬をしたままであったため、小人たちはガラスの棺を作り、その中に白雪姫を安置する。この白雪姫と結びつけられているのが Snäfridr で、スノリ・ストルルソン (1179-1241 年)[3]編による『ヘイムスクリングラ』に登場する女性である。『ヘイムスクリングラ』は「世界の環」という意味で、太古から 1177 年までのノルウェーの王朝史を扱ったサガである (スノリ 1976 S. 96)[4]。これまでの研究においても、グリム兄弟が白雪姫と Snäfridr を関連づけていたことは指摘されてきたが、それがどのような話であるのかという紹介はされて来なかった。『ヘイムスクリングラ』は邦訳がないため、独訳版より、グリム兄弟が関連づけていた箇所を訳出してみたい。

> ある冬、ハラルド王は高地であちこちの宴会をまわった。[...] 冬至祭の夜に、Svali という名のラップ人が戸口にやってきた。それは王がちょうど食卓に着こうとしていた時だった。その男は王に知らせをよこし、自分のところに出てくるように言ってきた。王はこの知らせに対して腹を立てた。王の怒りはこの知らせを持ってきた男に向けられた。しかし Svali は、それにもかかわらず王にもう一度、言伝を頼んだ。その男は、丘の反対側に小屋を建てても良いと王が許可を与えたあのラップ人であることを伝えさせた。それで王は外に出むいた。ラップ人の男と一緒に行くと言った。ふたり

---

[1] その他『エッダ』の「シグルドリーヴァの歌」では、ブリュンヒルドはシグルドリーヴァという名になっているが、ここでも同様のことが歌われている (テクストは、谷口 1973 S. 144 を参照のこと)。

[2] これはケニングという詩の技巧のひとつで、ひとつの概念をふたつの語で言い換える (ここでは「火」を「樹の 敵」としている) 語法である。『エッダ』においては少なかったが、後に 9 世紀から 10 世紀前半に最盛期を迎えるスカルド詩 (韻律詩) において多用されるようになったという (谷口 1973 S. 290)。

[3] アイスランドの歴史家・法律家・詩人・政治家である。

[4] 『ヘイムスクリングラ』について、ヴィルヘルムは、「スノリは古い伝説を集め、それから北欧の歴史を作った。ヘロドトスのように」(W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 134) と記し、『歴史』を著したヘロドトスになぞらえている。

は丘の上に上った。家臣の何人かは励ましたが、何人かはやめるように忠告した。そこで Svali の娘の Snäfrid が立ち上がった。非常に美しい女である。彼女は王のために杯に一杯の蜜酒[1]を酌した。彼は両方を手にとった。つまり杯と彼女の手の両方をである。あたかも、彼の体全体から火がほとばしり出るかのようだった。彼は、今晩にでも彼女のもとで寝たいと思った。しかし Svali はこう言った。王が Snäfrid と婚約し、彼女を法律上の妻とするならという条件つきでなければならない。そこで王は、彼女と婚約し、彼女を妻とした。王は彼女をあまりにも激しく愛したので、彼の国のことやその他、王として彼の肩にかかっていることも全て忘れてしまった。ふたりは 4 人の息子を得た。[...] **その後、Snäfrid は死んだ。しかし彼女の顔色はちっとも変わらなかった。彼女は生きていた時と同じように赤みを帯びていた。王はずっと彼女のもとに腰を下ろし、彼女がもう一度生気を取り戻すのではないかという望みをかけていた。王が彼女の死を嘆き、3 年の時が過ぎた。**しかし国の全ての人は、彼の理性を心配していた。賢い Thorleif の治療法が、王の感覚混乱を取り除くことに成功した。彼はそうしたことを上手に処理する方法を知っていたので、まずはこのように上手に語りかけた。「王様、あなたがこのように美しく高貴な女性を愛し、彼女が望むように、羽毛の入った枕や高貴な織物で敬意を表していることは不思議なことではありません。しかし貴方の敬意は傷つけられていますし、彼女の名誉もまた然りです。なぜなら、彼女はずっと同じ衣装のままそこに横たわっているからです。彼女をその場から持ち上げて、衣装を取り替えるのがよろしいでしょう。」彼女が持ち上げられた時、腐敗臭が立ち昇り、死体のひどい臭いでいっぱいになった。そこで急いで薪の山が作られ、彼女は燃やされた。その前に、彼女の死体はすっかり青黒くなった。(これは死の神ヘルの色である。) 死体からは蛇やとかげや蛙など気持ちの悪い虫が出てきた。そうして彼女は灰の中に沈んだ。王は理性を取り戻し、愚かな事をやめた。王は国をかつてのように統治した (Snorri 1965 S. 114f.)。

このように、不気味な終わり方をしているサガであるが、グリム兄弟は、白雪姫の中に Snäfrid の姿を、そして小人の中にハラルド美髪王を見ていたのである。

さて、次に指摘されていたのは、羽を落としていく金の鳥の話、(「金の鳥」KHM 057) である。この話では、金のりんごが毎晩何者かによって奪われるため、王の 3 人の息子が寝ずの番をする。上のふたりは寝入ってしまうのだが、末の息子は、金の鳥がりんごを奪うところを目撃し、鳥をめがけて矢を射る。鳥は逃げてしまうが、金の羽が一枚落ちるのである。

グリム兄弟はこの話と「トリスタンとイゾルデ」を関連づけている。「トリスタンとイゾルデ」には種々の伝承が残されているが、例えば 15 世紀末の民衆本 (民衆本に関しては、本章第 4 節を参照) の『トリストラントとイザルデ』[2]では、マルク王は、甥のトリストラ

---

[1] Met。蜂蜜の中に約 80%含まれる糖分を発酵させて作った酒のこと。英語ではミード (mead)。北欧神話では、巨人の秘蔵する蜜酒をオーディンが飲み、詩人となったことも有名である。

[2] これは 1484 年 アウクスブルクのものである。これは 12 世紀後半のドイツの詩人、アイルハルト・フォン・オーベルクが記した韻文物語『トリストラント』をもとにし、無名の作家が散文に訳したものである。これは幾度も版を重ね、1664 年までの間に 14 版が刊行されたという

ントがかわいいあまり、妻を娶ろうともせず、トリストラントを自分の跡継ぎにするつもりでいる。しかしそれをおもしろく思わない家臣たちは、王に妃を迎えるように何度も切実に訴える。王にはその気はなく、解答を先延ばしにしているのである。

> さて、約束の期限の間というもの、王はいかな答を出すべきか迷いに迷っていた。どうしたら家臣らを納得させ、この種の願いごとを諦めさせられようか。彼らがどう思うにせよ、王はいかな女性をも妻とするつもりは微塵もなかったのである。王は坐して思案にくれていた。と、このとき二羽の燕が縺れあっているのが見えた。**すると一本の美しく長い女の髪が、この二羽の燕からはらりと落ちた。**王はそれを拾い上げ、ひとりごちた。
>
> 「この髪で、余は断り切れるやも知れぬな。**この髪の持ち主以外のいかな姫をも妃には迎えぬ**と申してみよう。されば、かかる望みを叶えらるる者はおるまいし、余もこの類の願いごとからは免れられよう。たとえ、我が甥を敵視し、罪なきにもかかわらず快く思わぬ輩のあろうとて、あれに禍いを及ぼす力ある者は到底おるまい。なに、甥がいったんこの国土を継いでしまえば、こうした輩とて彼を正当なる主君と認めざるを得まい」(小竹 1988 S. 47)。

同様の記述はまた、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Strassburg)[1]が 13 世紀初頭頃に書いたと言われるトリスタンの物語の中にもある[2]。

このようにかなり異なる伝承であり、多少無理があるようにも思われるが、グリム兄弟は、金の髪の持ち主を探し出すというところと、金の羽からその鳥を探し出すところにつながりを見出していたのである。

グリム兄弟が上記序文で指摘している話はもうひとつあった。それは「金のがちょう」(KHM 064) である。3 人の娘、司祭、教会の下働き、ふたりの農夫の 7 人が、金のがちょうにくっついて離れられなくなるという、よく知られた昔話である。この場面との関連が指摘されていたのは、スノリの『エッダ』の「詩語法」に出てくる挿話である。

ある時、旅に出ている 3 人のアース神、オーディン、ヘーニル、ロキが、料理穴 (熱した石で肉を料理する穴) の中に牡牛を入れ、食事にしようとする。ところが牛はいつまでたっても焼きあがらないのである。

> すると頭上の樫の木のあいだでことばがきこえ、料理穴の中でできないようにして

(小竹 1988 S. 350f.)。

[1] 生没年不詳。シュトラースブルク (現、ストラスブール) 出身の中世ドイツ文学の代表的詩人。彼の身分は、官吏、学校の教師、学者、聖職者などと推測されている。未完の『トリスタンとイゾルデ』(1210 年頃) は中世ドイツ文学の代表作と言われる。これは、16 世紀のハンス・ザックスの悲劇『トリストラント殿と麗しの王妃イザルデの悲恋について』や、19 世紀のワーグナーの楽劇『トリスタン』の他、多くの作品に影響を与えた。

[2] やはりここでも、金の髪は言い逃れの策として用いられている。コーンウォールのマルケ王は、彼女としか結婚しないと誓ったのは、「彼の心がほかのひとよりもこの乙女に、少しでも余計傾いていたからではなかった。彼が誓ったのは策略のためであって、こんなことがいつか実現しようとは全く思いもしなかったのである」(シュトラースブルク 1976 S. 142f.)。

いるのはおれのせいだ、とそこにとまっている者がいった。彼らがその方を見上げると、そこに一羽の鷲がとまっていた。小さな奴ではなかった。

すると鷲がいった。「その牡牛をおれにたっぷり食わせてくれるなら、料理穴の中のものはできるだろうぜ」

彼らはそれに同意した。すると鷲は樹から下りて、料理穴の上にとまり、すぐに、まっさきに牡牛の二つの腿肉と二つの肩肉をかっさらった。

するとロキは腹を立て、大きな棒をつかみ、力いっぱいふりまわし、鷲の体めがけて突いた。鷲はその打撃をひらりとかわすと飛び上った。すると**棒は鷲の尻にくっつき、ロキの両手が棒のもう一方のはしにくっついた。**鷲は空中高く飛び上ったので、ロキの足は石や小石の山や木にさわり、腕は肩からもぎれそうに思えた。ロキは叫び声をあげ、鷲にゆるしてくれと一所懸命にたのんだ (スノリ 1983 (谷口訳) S. 1f.)。

こうして、巨大な鷲に変身していたシャチによってロキは連れ去られる。シャチは若返りのりんごと、そのりんごの番人である女神イズンと引き換えにならば許してやるという。そうして、ロキの計略によりイズンが連れ去られ、アースの神々は若さを保てなくなるという一大事に発展するのであった。

このように、一致点は、動物から離れられなくなるという箇所だけなのだが、グリム兄弟はこのことをわざわざ『昔話集』初版の序文に示しただけでなく、この昔話に付した注釈でも取り上げているのである[1]。

さて以上が、上記の序文で指摘されていたつながりである。グリム兄弟はこのように、非常にささいなところにまで神話や古い文学とのつながりを見出しており、それが多少強引と思える場合も少なくない。しかしグリム兄弟の「昔話—神話観」は、『昔話集』の編纂にも少なからず影響を及ぼしているため、本章では、グリム兄弟が考えていたこの両者間のつながりをさらに詳しく考察していく。

第１節　古代ゲルマンとのつながり

ここではグリムの『注釈篇』や『神話学』への記載から読み取れる『昔話集』と古代ゲルマンとのつながりを、それぞれ典拠とされた作品ごとに、時代の古い順から包括的に考察するが、そうすることでグリムの「昔話—神話観」を具体的に見ていきたい。

---

[1] 「この昔話で、がちょうを触った人や、それに関わった人がみな、がちょうに貼り付いて離れなくなってしまうのと同様に、ロキは、鷲のシャチに打ち付けた棒から離れなくなってしまう。棒は鷲から取れなくなり、彼は連れ去られてしまうのだ」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 127)。

1. 『エッダ』

> エッダの歌謡は、非常に多くの点で私たちドイツ人と結びついているものですから、それを外国のものだとは言うことが出来ないほどなのです (Steig 1892 S. 112)。(ゲーテに宛てたヴィルヘルムの書簡、1816 年 8 月 1 日)

ドイツにはゲルマン太古の史料がほとんど現存しないため、グリム兄弟は『昔話集 注釈篇』において、ドイツのものに近い北欧の『エッダ』やサガ[1]を、古代ゲルマンの史料として頻繁に取り上げている。それは『神話学』における手法と同様である。ヤーコプは、『神話学』の序文において、北欧の言語とドイツの言語が近いものであるのと同様、北欧の神話とドイツの神話も (幾らかの相違点はあるが) 近いものであると記している (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. VII)。それでも、出来るかぎり北欧神話には依拠せずに『神話学』を構築することを明言しながら、実際には、北欧神話を少なからず援用しているのである[2]。むろん、自分たちが集めた昔話や伝説の中に見出した神話的な要素も、『神話学』の典拠として扱っているが、それだけでは無理があるからである。

さて、グリム兄弟は『エッダ』の中の英雄伝説をドイツ語に翻訳し、1815 年に『古エッダの歌』を刊行しており[3]、『エッダ』に関する造詣が深かったことは既に述べた。そして昔話を収集する際にも、この伝承とのつながりが目に留まり、そうした点を『昔話集 注釈篇』(第 3 巻) や『神話学』に示したのであった。

グリム兄弟が翻訳したのは、9 世紀から 13 世紀にかけて古ノルド語 (韻文) で書かれた『エッダ』で、『古エッダ』『セームンドのエッダ』と呼ばれているものである。これとは別に、スノリ・ストルルソンが 13 世紀に散文で書いた『エッダ』(『新エッダ』『スノリのエッダ』) も存在するが、グリム兄弟の指摘には、そのどちらも登場する。

既に「金のがちょう」(KHM 064) と『エッダ』のつながりを指摘したが、ここではもうひとつ「ルンペルシュティルツヒェン」(KHM 055) の例を取り上げておく。

この話の冒頭で、粉屋は、自分の美しい娘が**わらを紡いで金にすることが出来る**と、王に嘘をついている。この話の注釈には以下の指摘がある。

---

[1] 『エッダ』は、北ゲルマン人の間に伝わる神話や英雄伝説であり、もともと韻文の歌謡の形で伝えられていた。内容的には、全ゲルマン種族のもつ伝承との共通点が多い。それに対してサガは、12、13 世紀頃からアイスランド人が散文で書いたもので、内容は、「植民前後の事情、アイスランド定住後の生活、海外でのヴァイキング活動、同時代の首長らの争いなどを年代記風にしるしたもの」(谷口 1976 S. 91) である。

[2] ヤン・デ・フリースによる指摘がある。グリムは、ゲルマンの諸部族の神話は、源が同じだったと考えていたため、『神話学』で北欧神話を頻繁に援用している (Vries 1970 S. 53)。

[3] Lieder der alten Edda. Aus der Handschrift herausgegeben und erklärt durch die Brüder Grimm. Erster Band. Berlin 1815. グリムは続刊 (全 3 巻) を予定していたが、結局第 1 巻が刊行されただけで終わってしまったものである。岡本によれば、左ページに古ノルド語の原詩、右ページにドイツ語訳、さらに巻末にはドイツ語の散文訳が付けられているという (岡本 2000 S. 111)。これは、

ドイツの昔話の多くに、**粉屋と粉屋の娘**が登場する。中でもこの昔話は北欧のフェニヤとメニヤを強く想起させる。このふたりは、欲しいと思うものを (臼で) 挽き出すことができた。フロージ王はふたりに平和と**金**を挽き出させた (Grimm 1994 Bd. 3 S. 107)。

このようにグリムは粉屋と臼、そして金を「紡ぎ出す」ことと金を「挽き出す」ことを結びつけていたのである。グリム兄弟が指摘しているフェニヤとメニヤは、『エッダ』の「グロッティの歌」に登場するふたりの女巨人である[1]。『エッダ』の該当箇所を見てみよう。

さて、フェニヤとメニヤ、未来の読める二人の女が王の館にやってきた。この大力無双の娘たちはフリズレイヴの子フロージのところで下女として捕らえられたのだ。

二人は碾臼の台のところにつれて行かれ、灰色の臼をまわすことを命じられた。彼は下女の出す音をきくまでは、どちらにも、うまずたゆまず仕事をさせた。

彼らは沈黙することを知らぬ石臼の音をとどろかした。
「碾臼の台をおいて、石をのせよう」
彼は下女たちに粉をひけと命じた。

ゴロゴロ、ガラゴロ、まわる石を動かした。フロージの奴隷たちはほとんど寝入っていた。すると、粉をひいていたメニヤがこういった。

「フロージに富をひき出そうぞ。しあわせをひき出そうぞ。幸運の**石臼でたんと黄金をひき出そうぞ**。彼が富の上に坐り、羽毛の上に寝、喜んで目を覚ますように。それでこそよくひいたといえる。

ここでは他人を傷つけてはならぬ。不幸をはかってはならぬ。他人の生命を狙ってはならぬ。鋭い剣をふるって切ることはならぬ、兄弟を殺した者が縛られているのを見つけても」(谷口 1973 S. 213)。

話の雰囲気も状況もずい分異なるが、それでもなおグリム兄弟は両者の間に上記のつながりを見出し、『昔話集』に付けた注釈の中で指摘したのであった。

2. サガ

『エッダ』はもともと韻文の歌謡形式で神話や英雄伝説を物語るものであったが、サガは散文で、主にアイスランド人の入植事情などを年代記風に語るものである (谷口 1976 S. 91)。中でも「伝説的サガ」と呼ばれることもある一群のサガは、アイスランド殖民以前の

グリム全集の第 48 巻として刊行が予定されている。
[1] このふたりについては、スノリの『エッダ』「詩語法」にも言及がある (スノリ 1983 S. 55f.)。

伝説的な英雄を扱っており、『エッダ』の中の英雄伝説と共通するものも多い。そのひとつの『ヴォルスンガサガ』は、既にブリュンヒルドに関して引用に用いたものであるが、これと関連付けられている昔話をもうひとつ見ておこう。

「烏」(KHM 093) では、母親に呪いをかけられて烏になってしまった王女がいる。この烏を助けるために、男が森の家に行く。お婆さんが勧める飲食物を一切口にしてはならない、と王女に忠告をされていたにもかかわらず、男はお婆さんの言葉に負け、飲み物を一口飲んでしまう。これに関して、グリム兄弟は注釈の中で次のように指摘している。

> 女が飲まないように警告するが、誘惑に負けて男が飲んでしまう眠りの杯 (Schlaftrunk) は、北欧のグリームヒルドの忘却の杯 (Vergessenstrank) である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 170)。

『ヴォルスンガサガ』では、シグルズは、鳥の言葉に従って山に向かい、「眠りの茨」に刺されて眠るブリュンヒルドを目覚めさせる。そこでふたりは結婚を誓う。その後、シグルズはギューキ王の館を訪れる。ギューキ王の妻グリームヒルドは、シグルズが比類なき人物であり、莫大な宝をも所有しているため、彼女は、シグルズが娘と結婚して留まってくれることを望む。しかしグリームヒルドはシグルズがブリュンヒルドを深く愛していることに気づき、ある晩、彼女はシグルズに角杯を差し出すのである。

> ある晩、彼らが坐って酒を飲んでいたとき、王妃が立ち上って、シグルズのところに行き、彼にむかって、いった。
>
> 「ここに滞在されますことは嬉しゅうございますわ。ご要望のものは何でもご用立ていたしましょう。**この角杯をとって、お召し上りください**」
>
> **彼はそれを受けとって飲み干した。**
>
> 彼女はいった。
>
> 「ギューキ王があなたの父に、わたしが母に、グンナルとホグニ、それに誓いを立てたすべての者が、あなたの兄弟になるでしょう。そうすればあなたにならぶものはありますまい」
>
> シグルズはそれを快くうけとった。**そしてこの飲物によって彼はブリュンヒルドのことを忘れた。**彼はそこにしばらくの間滞在した (谷口 1979 S. 572)。

この杯の効果により、ブリュンヒルドのことを忘れたシグルズは、そこに2年半もの間滞在し、ついにグズルーンと結婚してしまう。男が婚約者を忘れるというこのモチーフは、昔話ではしばしば語られるものであるが、グリム兄弟は、まずはこのサガと関連付けているのである。このモチーフに関しては後に第2章第2節で再び言及することになる。

次に、別のサガと関連づけられている昔話をもうひとつ考察しておきたい。

「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135) の親切な継娘は神を助けたため、お礼に白く美しくしてもらう。一方、意地の悪い実の娘は黒く醜くされてしまう。白い娘は後に、王と結婚することになる。しかし城に向かう途中で、妬んだ継母が白い娘を川に突き落とす。すると娘は白い鴨になり、城の台所に現れては、火のそばで暖まるのである。(この話は、第Ⅲ

部で再び考察する。)

この話にグリム兄弟は次のような注釈を付けている。

> 花嫁は水に落ち、溺れ死ぬ。そして夜に台所の火のところに戻って来て、温まる。なぜなら彼女はぬれているからだ。ちょうど同じ様に、古代北欧のサガでも溺れた者たちが、ぬれた服をまとって夜に帰ってきて、火の近くに座り、上着をしぼる (Grimm 1994 Bd. 3 S. 230)。

ここでグリム兄弟が連想しているのは『エイルの人びとのサガ』である。それは、海で溺死したソーロッドとその一行の話である。長いものではないので、全文を転載する。

> 54 貢買いのソーロッドの溺死。伝染病と幽霊のわるさが続くこと
>
> **ソーロッドとその一行は**ネスから干魚をもって出発した**朝全員エンニの沖で生命をおとした。**船と干魚はエンニに漂着したが、**死体は見つからなかった。**その知らせがフローザーに伝わると、キャルタンとスリーズは隣人たちを葬式に招待し、ユールのビールを葬式用に使った。そして最初の**晩**、人びとが葬式にきて席についた時、**百姓ソーロッドとその一行が全員ずぶ濡れになって部屋の中に入ってきた。**人びとはソーロッドを快く迎えた。というのはこれはよい前兆だと思われたからだ。海で死んだ者が自分自身の葬式にやってくるとは、海の女神ラーンに親しく迎えられたことは確実だと当時の人びとは思ったのだ。当時人びとは洗礼を受け、キリスト教徒と呼ばれていたけれども、まだ古い迷信からほとんどぬけきれていなかったのだ。ソーロッドとその一行は部屋の中を隅なく歩きまわった。部屋には二つドアがあったが、彼らは台所の方へ行き、誰の挨拶にも答えず、**火のそばに坐った。**家の者は台所から逃げ出した。だがソーロッドとその一行は火が白い灰になるまでそこにいた。それから消えた。葬式のあった間**毎晩**こういった状態で、**彼らは火のところにやってきた。**葬式でこのことが話題を呼んだ。ある者は葬式が終ればこれもやむだろうといった。招待客は宴が終ると帰っていった。だが家の人びとはかなり重い気持ちで後に残された。招待客が去った晩、いつものように**台所の火がつけられた。**そして火が燃えると**ソーロッドはその一行と入ってきたが、全員ずぶ濡れだった。彼らは火のそばに坐り、服をしぼり始めた。**そして彼らが坐りなおしたとき、義足のソーリルとその仲間六人が中に入ってきた。彼らは全員土ぼこりにまみれていた。服をふって埃をソーロッドたちの方にはたいた。予想される通り、家の者たちは台所から逃げ出した。このためその晩は明りも焼け石も、その外火の気は一切なしだった。翌日の晩は別の棟で火をおこした。幽霊たちはそこへはこないのではないかと思ったのだ。ところがそうはいかなかった。というのはすべて前夜通りのことが起り、**両方の幽霊が火のそばにやってきた**からだ。三日目の晩にキャルタンが台所に大火を焚き、台所の火は別棟でおこしたがよかろうと助言し、その通りにされた。そしてその結果ソーロッドらは大火のそばに坐り、家の者たちは小火のそばで過した。こうしてユールの期間はすぎた。その頃干魚の山の騒音はますます大きくなってきていた。夜も昼も干魚が引きさらわれるような音がきこえた。その後干魚が必要になった時があった。そこで蓄えのところに行った。そし

てその山に登ると不思議なものが見えた。焦げた牡牛の尻尾のようなものが積まれた干魚の間から出ていた。それは短くて海豹の毛が生えていた。荷の山に登った男は尻尾をつかんでひっぱり、ほかの者にも一緒にかかれといった。そこで男も女も干魚の山に登り、尻尾をひっぱったが埒があかなかった。人びとは尻尾は死んだ動物のものだろうと説明するしかなかった。だが彼らが力一杯ひっぱった時、尻尾は彼らの手からすり抜け、しっかり握っていた人たちの手の平から皮が剥けた。だがその後は尻尾は見えなくなった。そこで干魚をもち上げてみると、魚という魚は皮から身がそがれていて、下の方を探ってみると魚は全然残っていなかった。ところが、そこでも荷の中に生きものは見つからなかった。この出来事の後すぐ義足のソーリルの妻、魔女のソルグリーマが病気になり、まもなく死んだ。そして埋葬された晩に主人ソーリルの幽霊の一団の中に入っているのが見られた。例の尻尾が見られてから悪疫がまたぶり返した。そして男より女の方が沢山死んだ。一度に六人もの人が死んだ。そして多くの者がお化けや幽霊を恐れて逃げた。秋にはそこに三十人の下僕がいたのが、十八人が死に、五人が逃げ、ゴイ（二月中頃から三月の中頃）の後には七人しか残っていなかった (谷口 1979 S. 513f.)。

このサガは、グリムの昔話とは全く異なる雰囲気を醸し出しており、最後も不気味な終わり方をしている。一方、「白い嫁と黒い嫁」(KHM 135) では、城の台所で鴨と言葉を交わしたコックが、王にその出来事を伝えたため、娘はもとの姿に戻ることができ、昔話らしくハッピー・エンドで終わっているのである。

このように、およそ関連が無いように見えるふたつの伝承の間にさえも、グリム兄弟は相似点を見出していたのだ。

3. 『デンマーク人の事績』

次に「金の毛が 3 本ある悪魔」(KHM 029) という話に着目してみたい。ここでは、貧しい女が福の皮をかぶった男児を産んでいる。この男児が王女を妻にするという予言を聞いた王は、それを妨げるべく画策する。それでもこの少年は王女と結婚してしまう。それでも納得の出来ない王は、結婚を認める条件として、「地獄に住む悪魔の頭から、3 本の金の毛を取ってくる」ことを要求する。そこにグリム兄弟は、北欧の文献との関連を見出し、注釈に次のように記している。

サクソ・グラマティクスの第八の書にこれに属する話があることが目をひく。トルキルは、ウートガルトに着く。それは地獄と同様に描かれている場所である。彼は、ウートガルティロキの長い毛を一本抜く。それは火の中でのように光っている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 69)。

サクソ・グラマティクス (Saxo Grammaticus, 1150 頃-1220 年) はデンマークの歴史家で、大司教アブサロンの書記を勤めた人物である。この大司教の依頼によりラテン語で書いた『デンマーク人の事績』(Gesta Danorum) が、上記の注釈で言及されている書物である。これは 16 巻からなるデンマーク史で、伝説的な先史時代から 1185 年のヴェンド族の屈服ま

でを扱っている。第9巻までの伝説時代の部分は北欧神話や英雄伝説を伝える貴重な史料のひとつである[1]。

「第八の書」において巨人の毛をとって来なければならない人物は、ゴルモ王の家臣のトルキルである。彼に悪意を持つ者たちが、王をそそのかし、トルキルをウートガルティロキという名の巨人のもとに行くように謀ったのである。

ウートガルティロキは、身の毛がよだつような洞窟の中に住んでいる。トルキルは仲間と共にその洞窟の中に入っていく。グリム兄弟が注釈で示唆している箇所を見てみよう。

> その中で、手と足を巨大な重い鎖につながれたウートガルティロキが見えた。悪臭をはなつその髪は長く、ピンと立っていて、玉椿の槍のようだった。髯の一本をトルキルは仲間の者に手伝ってもらって、辛抱しているウートガルディロキの顎から引き抜き、自分の行為が容易に人に信じてもらえるように保管した (グラマティクス 1993 (谷口訳) S. 385)。

ウートガルディロキの吐く毒にやられ、随行した人々のうち、わずかふたりしか生き残らなかったが、トルキルはどうにか王のもとに帰還する。グリム兄弟の「金の毛が3本ある悪魔」(KHM 029) においては、主人公は悪魔の祖母が代わりに抜いてくれた3本の金の毛を手に持ち、無事に帰還するのである。この昔話との一致点は、金の毛を持ち帰るというところだけである。しかし、『神話学』の「ロキ」の章においても同様に、この昔話とウートガルティロキの関連が示唆されていることからも、グリム兄弟がこの関連を軽視していなかったことが分かる (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 202)。

4. 『古代デンマークの英雄歌』

『古代デンマークの英雄歌、バラード、昔話』(Altdänische Heldenlieder, Balladen und Märchen) という、1811 年にヴィルヘルムが単独で刊行した書がある。これはデンマークの古代歌謡などを翻訳したものである。

そして、この中の一つの歌と関連づけられているのが、「7羽の烏」(KHM 025) という昔話である。これは、自分の誕生がきっかけとなり、呪いをかけられて烏となってしまった7人の兄を救うために「ガラスの山」へ行く少女の話である。この昔話の注釈には、次のように記されている。

> 同様にシーヴァルトは、若馬で駆け上がり、ガラスの山の上の誇り高きブリュニルドを解放する (古代デンマークの英雄歌の S. 31 を参照) (Grimm 1994 Bd. 3 S. 57)。

「7羽の烏」の中のガラスの山に連想されたのは、「殺人によるシーヴァルトの死」に歌われているガラスの山である。この歌の冒頭部を見てみよう。

---

[1] これは、ハムレットの伝説を含むことで有名な書である。ヴィルヘルムは、ラテン語で記された『デンマーク人の事績』についてこのように述べている。「素朴な民謡を、重々しいローマの調子に押し込めることほど見当違いなことはない。サクソが無邪気に簡単に書きとめていたならば、民間伝説の素晴らしい収集となっていたことだろう」(W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 134)。

シーヴァルドは子馬を飼っており
それを手なずけた。
彼はガラスの山の上にいる誇り高きブリュニエルを手に入れた。
それは明るい日だった。
デンマークの王子！

騎士も連れも、
選りすぐりの者たちが彼女を求めて馬を駆った。
美しい乙女を得ようとするのだが
誰も山に登ることはできなかった。

山は高く、滑らかだった
父は娘を山の上に坐らせた。
父が娘を嫁がせようと思う者は
この世にはいなかったのだ。

そこで王の宮廷の猛き武士のもとに
要請がきた。
その宮廷の技で
試してみる者はいないかと。

次から次へと断る者ばかり
しかしシーヴァルトは臆せず言う。
私が若馬で試してみよう
ブリュニエルが手に入れられるかどうか。

彼は馬を駆る。道は遠い。
道ははるかであった。
シーヴァルドは臆することなく、ガラスの山を見る。
乙女はひどく笑った。

シーヴァルドは誇り高きブリュニルドを連れ帰る。
彼にとってこの旅はたやすいものだった。
彼はブリュニルドをよい主君のニールスに与える
よき友の流儀に従って (W. Grimm 1942 S. 76f.)[1]。

---

[1] この歌の続きは、『ヴォルスンガサガ』や『ニーベルンゲンの歌』と似ている。真実を知らされたブリュニルドは病気になり、シーヴァルドを殺すように夫に懇願する。夫のニールスはシーヴァルドを殺す。さらにブリュニルドも殺した上で自害し、悲劇で終わる。

このデンマークの歌は「烏」(KHM 093) の注釈においても指摘されている。やはりこの話にも、ガラスの山が出てくるからである[1]。「烏」においては、主人公の男は、どこにでも連れて行ってくれる馬を使ってガラスの山に登っているのであるが、そこにもヴィルヘルム・グリムは、上記のデンマークの歌や本章の冒頭で引用したブリュンヒルドの話を連想していたのである[2]。

5. 『ゲルマーニア』

グリム兄弟は、古代ゲルマンの史料として、タキトゥス (Publius Cornelius Tacitus, 55 頃 -113 年以後) も頻繁に用いている。中でも一番多く引用されているのが、ゲルマン諸部族の様子を記した『ゲルマーニア』(98 年)[3]である。これは、ゲルマン人の太古を知る格好の史料とされてきたが、タキトゥスは、堕落したローマ社会に対して警告する意味から、ゲルマーニアの精神を美化して書いている側面があるため、今日では史料としての信憑性は疑問視されており、事実としてそのまま用いられることはなくなっている。しかしグリム兄弟にとっては、頼るべき史料のひとつであり、『神話学』においても所々で引用がなされている。

グリム兄弟が『ゲルマーニア』の記述と結びつけたものには、例えば「がちょう番の娘」(KHM 089) がある。この話では、王子のもとに嫁ぐ途上で王女が侍女に脅され、彼女と入れ替わっている。ファラダは口をきくことが出来る馬で、全てを見て知っているため、侍女の差し金によって殺される。王女は懇願してファラダの首を門に釘で打ちつけてもらう。門を通りかかる度に王女は、ファラダの首に言葉をかける。ファラダもそれに返答する。このファラダについては、『注釈篇』と『神話学』のどちらにおいても言及があるが、ここでは『注釈篇』の記述を見てみよう (『神話学』では J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 549)。

> 打ち落とされた首の中に、(ミーミルの首と同じように) 言葉が宿り続ける。タキトゥスからも次の文章が引用出来る。「しかしなおこの種族に特有のものとして、馬の予覚・警告を求めることも行なわれる。——その嘶きと鼻嵐とをうかがう。」(ゲルマーニア 10) 注目すべきなのは、古代の北欧人は、いけにえの馬の頭を立てたことである。それによって敵に損害を与えることが出来ると信じたのだ (サクソ・グラマティクス 5. 75 を参照のこと) (Grimm 1994 Bd. 3 S. 169)。

---

[1] 魔法にかけられた王の娘が、ここでもガラスの山の上の金の城で助けを待っているのである。

[2] 「烏」の注釈にはこう記されている。「ここでもブリュンヒルドの解放が出てきている。まずは、前の話 (KHM 092) と同様に (とはいえ全く別の源から手に入れた昔話であるが)、巨人たちが宝をめぐって争う。しかし前話ほど明確ではない。ガラスの山の上の金の城は、北欧のサガでの、炎に囲まれた広間である。まさしく、**古代デンマークの歌**と一致している。そこではブリュニエルが**ガラスの山**に座っており、**特別な馬 (グラニ)** しかそこに登って来る事はできない」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 181f.)。ブリュンヒルドについては、『ヴォルスンガサガ』や『エッダ』の「ブリュンヒルドの冥府への旅」に歌われている。

[3] ライン川の西、ドナウ川の北に居住していたゲルマン諸部族について記された書で、前半部 (1-27 章) ではゲルマーニアの地理、住民の風俗・習慣・制度が概括され、後半部 (28-46 章) では制度や歴史が種族ごとにまとめられている。

ここではいろいろな指摘がなされているので、順番に見ていくことにする。最初にファラダの首と関連づけられているミーミル[1]の首に関しては、スノリの「ユングリンガサガ」(『ヘイムスクリングラ』の序章) に記述がある。ヴァン神族とアース神族は、ミーミルらを人質として交換することで戦に終止符を打つが、次のような事態に陥るのである。

> ヴァンはアースが人質の交換で自分たちを欺いたのではないかと疑った。そこで彼らはミーミルを捕えて首を剔ね、その首をアース神のところに送った。オーディンは首を受けとると、腐らないように薬草を塗り、その上で呪文を唱え、それが彼と話をして、多くの隠れたことを告げてくれるような魔力を与えた (スノリ 1976 (谷口訳) S. 81)。

不思議な力を持つファラダ (馬) の首をグリム兄弟は、北欧神話のミーミルの首と結びつけて考えていたのである。

さて注釈の中で次に引用されているタキトゥスの記述とは、『ゲルマーニア』の第 10 章の「神意の推知」の中の一節である。そこでは、ゲルマン人は切り取った若枝を投げる占いや、鳥を見ての占いだけでなく、馬を用いた占いも行っていたことが記述されている。グリム兄弟が省略している部分も含め、タキトゥスの記述を示しておく。なお、上記のグリムによる注釈で引用されている箇所はゴシックで示す。

> **しかしなおこの種族に特有のものとして、馬の予覚・警告を求めることも行なわれる。**さきに述べたかの神聖な森や林には真白な、いまだ人間界の用役には穢されていない馬が、公の手によって養われている。これを聖車に繋ぎ、その国の司祭が、王または首長とともにこれに随伴し、こうして**その嘶きと鼻嵐とをうかがう。**ただに人民のあいだのみならず、首長たち、ことに司祭たちのあいだにおいてさえ、これにまさって信奉される占いはない。というのは、彼らみずからは、ひとえに神の僕たるにとどまるに反し、馬は神と心を一にするものと考えられているからである (タキトゥス 1979 (泉井訳) S. 63)。

上記の注釈でさらに指摘されているのは、先に引用したサクソの『デンマーク人の事績』の一場面である。

ノルウェー王のゲーテールは、デンマークを攻撃して手中に収めようとする。しかし襲撃に出向いたラヴンは殺害されてしまう。そこでロレルとエーリクがデンマーク王と友好を結ぶために出かける。デンマークのグレープは、雄弁家のエーリクを試すべく口論をしかけるが負けてしまい、武力での復讐を目論む。そこで向かい来るエーリクに魔法の力で対抗しようとするのだが、その場面が、グリム兄弟の意図する箇所なのである。

> こうして**彼はまず神々へ生贄に、馬の首を切り取って棒の上に刺し、下に棒をあて**

[1] 巨人ユミルの息子。知恵を与える蜜酒の泉の番人。これを飲んでいたため彼は賢者となった。

がって馬の口を大きく開け、エーリクの企てをこの恐ろしいみもので台なしにしようと望んだ。というのも、未開人の愚かな心は、彼らの前に示された恐ろしい首をみて逃げ出すだろうと思ったからだ (グラマティクス 1993 (谷口訳) S. 178f.)。

こうして「敵に損害を与え」ようとするのだが、それは失敗している。

エーリクはすでに彼らの方にむかって歩いていた。遠くの方から**馬の首**に気がつくと、よからぬ企てがあることをさとり、仲間の者たちに沈黙をまもり、用心深く行動するように命じ、また不用意な言葉で魔法にきっかけをあたえないよう、むやみに言葉を発せず、もしも話す必要があるときは、みなにかわって自分が話す、とつけくわえた。こうして両者が川の流れを間にはさんだところまできたとき、**魔法使いたちはエーリクを橋から追い払うために馬の首をつけた棒を川のすぐそばにつっ立てた。**しかし彼はいささかも恐れずに、橋まで進んで呼ばわった。

「それをかついでおる者に、その悪運がくだれ。われわれには幸運が見舞うように」(グラマティクス 1993 (谷口訳) S. 179)。

そうしてエーリクが望んだとおりのことが起こるのであった。そして、谷口がこの箇所に付けた注釈によれば、(榛(はしばみ)の) 棒の先に馬の頭または頭蓋骨をつけて立てるのは、実際に敵を威嚇する方法であったという[1]。

このようにファラダの首ひとつとってみても、グリム兄弟は、スノリ、タキトゥス、グラマティクスに描かれているようなゲルマン古代の残滓を見出していたのであった。

第 2 節　中世叙事詩とのつながり

古代北欧の文学と中高ドイツ語の叙事詩や抒情詩の研究を専門的に行っていたのは、弟のヴィルヘルムであった。兄ヤーコプと共同で『哀れなハインリヒ』(1815 年) を刊行した後、ヴィルヘルムは『フライダンクの慎み』(1834 年)[2]、『薔薇園』(1836 年)[3]などの中高ドイツ語の作品の校訂や、『ドイツ英雄伝説』(1828 年) などの編纂を行っている。

そうした中世の叙事詩研究の成果が、やはり『昔話集』と『昔話集 注釈篇』(第 3 巻) にも反映されているのである。この節では、そうしたいくつかのものについて考察していきたい。

1. 『ニーベルンゲンの歌』

『ニーベルンゲンの歌』は周知のように、1200-05 年頃に成立したと言われている中世のドイツの英雄叙事詩だが、その再発見がなされたのはグリム兄弟が生まれる少し前であ

---

[1] 谷口はさらに『エギルのサガ』の 57 にも該当する部分があることを指摘している (グラマティクス 1993 S. 429)。エギルもこのような棒 (ニーズストング) を立て、ノルウェーのエイリーク王の国外追放を土地神に祈るのである。谷口 1979 S. 93 参照のこと。

[2] 1228 年の作品。箴言風の短い二行詩と四行詩である。

[3] 『薔薇園』については、渡邊 1999 を参照。

った。中世文学に関心を持っていたチューリヒのボードマー (Johann Jakob Bodmer, 1698-1783 年) のすすめによって、医師のオーベライト (1725-98 年) が 1755 年にフォーアアルルベルクのホーエンエムス伯爵家の図書館で『ニーベルンゲンの歌』の写本を発見したのである。続いて 1768 年にはザンクト・ガレンで、さらに 1779 年にはホーエンエムス伯爵家でまた別の写本が発見されている (石川 2001 S. 251)。

『ニーベルンゲンの歌』のテクストそのものは、ボードマーが 1757 年に、続いてチューリヒ出身のミュラー (1740-1807 年) が 1782 年に刊行したが、刊行当初はあまり反響を呼ばなかったという。当時のドイツには自国の作品の価値を尊重するよりも、もっぱら外国文化の方に目が向けられていたのである。しかし、ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803 年) らの影響もあり、ロマン派の人々が中世文学に目を向け始めたのだった。例えばティークは 1803 年に刊行した『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』の序文において『ニーベルンゲンの歌』に言及をしている (石川 2001 S. 252f.)。

そしてグリム兄弟は、恩師のサヴィニーの書斎において[1]、ボードマーによるミンネ歌謡の版本やティークの『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』との出会いをはたした。このことはヤーコプが『自叙伝』に記しているのだが、特にティークの上掲書の序文からは強い感銘を受けている (Denecke 1985 S. 20)。そうして、グリム兄弟は中世に関心を寄せ始めたのだが、ことに『ニーベルンゲンの歌』には早くから注目しており、兄弟そろってそれに関する論文を書いている。

ヤーコプは 1807 年に「ニーベルンゲンの歌について」を著し、『ニーベルンゲンの歌』の写本や作者の問題について論じた[2](J. Grimm 1965a Bd. 4 S. 1f.)。一方ヴィルヘルムは、1809 年に「フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン編のニーベルンゲンの歌」を著し、『ニーベルンゲンの歌』の高貴さに注意を喚起した最初の人物としてティークを評している。そして古いものを新しく近代化することは許されないとも論じている。つまり、民衆詩 (Volksgedicht) は、それが属する時代から引き離されてはならないと主張したのである。そしてハーゲンは忠実を心がけてはいるが、彼の翻訳では新旧の形式が混じってしまっており成功していないと評した[3](W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 61f.)。

そのように『ニーベルンゲンの歌』にも強い関心を示していたグリム兄弟は、自分たちが集めた昔話の中にも、やはり彼らは『ニーベルンゲンの歌』とのつながりも見出していた。

例えば「金の山の王様」(KHM 092) への注釈において幾つかの類似点が指摘されている。この話には、羽織ると姿を蝿に変えることが出来るマントが登場するのだが、これによって主人公の男の姿が見えなくなるところにグリム兄弟は着目したのだ。

羊飼いの格好をして気付かれずに（町の）中へ入ること[4]、そしてマントをまとって

---

[1] ヤーコプは 1802 年、ヴィルヘルムは 1803 年よりマールブルク大学で法律を学び始めた。そして師サヴィニーの自宅を訪問し、その書斎を利用する許可を得ていた。

[2] おおよその内容が、谷口 1985 S. 22f. で紹介されている。

[3] この論文もおおよその内容が谷口 1985 S. 24f. で紹介されている。

[4] 主人公は金の山の王となるが、両親のもとに一度帰郷する。しかし町の番人が中に入れてく

姿が見えなくなり、蝿の姿になる (ロキが姿を変えるのと同様。インドのハヌーマンも同様にしてシーターのところへ行く) ところにはより明確に、「姿を消すという**隠れ蓑**の力」と「北欧伝承での、姿を変えること」が現れている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 181)。

そして『ニーベルンゲンの歌』の第 337 詩節を参照するように指示している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 181)。ここではその 336 から 338 までの詩節を見てみたい。これが収められている第 6 歌章では、ブリュンヒルドに求婚するつもりのグンテル王が、ジーフリトに助力を要請している。そこでジーフリトは、グンテルの妹のクリエムヒルトを妻にくれるならという条件つきで、求婚の旅に供することを誓うのである。

ジーフリトは**隠れ蓑**(みの)を携えてゆかねばならなかった。
これは猛き英雄が大骨を折って、
かのアルプリーヒという侏儒(こびと)から手に入れたものであった。
身分よく勇敢な武士たちは船旅の支度をととのえた。

強いジーフリトが**隠れ蓑**を身につけると、
並々ならぬ力が身内に生じてくるのであった。
すなわち彼自身の力の外に十二人分の力が加わるのである。
かくて彼は巧みな策略で、かの素晴らしい婦人を打ち負かしたのであった。

またこの隠れ蓑は、これを身に纏った人は何をしようと、
だれからも姿が見えないという、不思議な作用をもっていた。
このようにして彼はプリュンヒルトを手に入れたが、
それが彼にとって憂いの種とはなるのである (相良 1993 前編 S. 97)。

また、グリム兄弟が上述の注釈で指摘しているように、北欧の伝承においても変身のモチーフがしばしば登場している。巨人シャチが鷲に姿を変えていることは、本論でも既に指摘したとおりであるし[1]、ロキは蝿の姿だけでなく[2]、雌馬になったり[3]、フレイヤ女神の鷹の羽衣を借りて変身したりするのである[4]。

さて、グリム兄弟は『ニーベルンゲンの歌』に関して、同じ「金の山の王様」の注釈の中でさらにふたつの類似点を指摘している。ひとつは、『ニーベルンゲンの歌』において勇士らが宝の分配でもめ、仲裁人 (すなわちジーフリト) を呼ぶのと同様に、この昔話でも 3 人の大男が父親の遺産[5]の分配をめぐって争っており、主人公の男に、これの分配を頼んで

れないため、羊飼いの格好で町の中に入る。
[1] スノリ『エッダ』「詩語法」2 にある (スノリ 1983 S. 1f.)。
[2] スノリの『エッダ』「詩語法」43 にある (スノリ 1983 S. 41f.)。
[3] スノリの『エッダ』「ギュルヴィたぶらかし」にある。雌馬に変身したロキは、スレイプニルを生んでいる (谷口 1973 S. 258f.)。
[4] スノリの『エッダ』「詩語法」4 にある (スノリ 1983 S. 3f.)。
[5] 「頭という頭はみな落ちろ、俺のだけは落ちるな」と言うと、全員の頭を落とすことの出来

いることである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 181)。

もうひとつは、この昔話の中に出てくる剣 (「頭という頭はみな落ちろ、俺のだけは落ちるな」と言うと、全員の頭を落とすことの出来る剣) が、『ニーベルンゲンの歌』では名剣バルムンクにあたるということである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 181)[1]。

『ニーベルンゲンの歌』に対する指摘は、さらに他の昔話の注釈においてもなされているのだが、本論では別の叙事詩の考察に進むことにする。

2. 『クードルーン』

『クードルーン』は 1220 - 40 年頃に成立したと言われる中世ドイツの英雄叙事詩で、作者はバイエルンかオーストリア出身の聖職者とみられている。クードルーンの祖父の代からの 3 世代が物語られている。まずはヘテル王が王女ヒルデを奪略する物語が語られる。その後タイトルにもなっているクードルーンの話になる。クードルーンは、ヘルヴィヒと婚約をするが、ノルマンディーの王子ハルトムートに誘拐される。しかし、ヘルヴィヒとの結婚の約束を 13 年間守りつづけ、ついに彼に救出されるのである。この作品は『ニーベルンゲンの歌』から大きな影響を受けていると言われるが、『ニーベルンゲンの歌』とは対照的に、最後は和睦的に終っている。

この叙事詩もやはり 19 世紀 (1816 年) に再発見されて非常にもてはやされ、新高ドイツ語訳 19 点、翻案 9 点、戯曲化 16 点が出たほどで、数の上では『ニーベルンゲンの歌』の改作を上回っていたという (古賀 1996 S. 541f.)。

ヴィルヘルムはこの叙事詩の研究にも携わっており、ベルリン大学では 1843 年から 1849 年まで『クードルーン』についての講義を行っていた[2]。

さてこの『クードルーン』は、何より「灰かぶり」(KHM 021) の注釈において取り上げられている。

> クードルーンは、不幸にみまわれ、**灰かぶり**にならざるを得ない。王妃であるにもかかわらず、**火を起こし、塵を自分の髪の毛で拭き取らせられる**のである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 50)[3]。

これは、ハルトムートに誘拐されたクードルーンの挿話を指している。クードルーンは、自分の父親を殺し一族を傷つけた男との結婚を拒絶する。そこでクードルーンの世話は、彼の母親であるゲールリント王妃に一任されるのだが、この王妃は、昔話の継母も顔負けの意地悪をするのだ[4]。そしてクードルーンと彼女の侍女に、辛い仕事を与えて苦しめる。

る剣、羽織ると姿を蝿に変えることが出来るマント、行きたいところに連れて行ってくれる長靴の 3 つである。

[1] 宝の分配と、バルムンクについては、相良 1993 前編 S. 31ff. を参照のこと。

[2] 『小論集』にその講義録 (Einleitung zur Vorlesung über Gudrun.) が収録されている (W. Grimm 1992 Bd. 4 S. 524ff.)。

[3] ここでグリムが指示しているのは、3986 3991 4021 4077 4079 (Bolte/Polívka 1963 Bd. 1 によれば Str. 996, 1005, 1019) である。

[4] ただしハルトムートの妹のオルトルーンが、クードルーンに同情を寄せ、親切であるところは、灰かぶりの継姉たちとは対照的である。

グリム兄弟が指摘している、クードルーンが火を起こすように命じられるところを見てみよう。

この悪魔のような女は、美しい王女に向かって言う、
「喜びを拒む者は、苦しみを味わうがよい。
あたりを見渡しても、あなたを苦しみから守る者はいない。
毎朝、私の部屋の暖炉に火をつけ、その火種を守るがよい」

その気高い王女、クードルーンは言う、
「母のもとでは、私は炉に薪をくべたことなどありませんが、
天上の神さまが、私をこの苦しみからお救いになるときまで、
あなたがお命じになることが何であれ、それを仕事といたします」

ゲールリントは言う、「あなたは、私が生きているかぎり、
ほかの王女たちがしないことであれ、何でもしなければなりません。
私は、あなたの思い上がりを、いやというほど懲らしめてやります。
今日のうちに、あなたは侍女たちと別れなければなりません。

聞けば聞くほど、あなたのうぬぼれぶりには腹が立ちます。
あなたがいつも辛い思いをするのは、そのためなのです。
そのねじ曲った根性を、たたき直し、
その思い上がりを沈め、傲慢さの根を断ち切ってみせます」(古賀 1996 S. 321f.)。

そして、王妃ゲールリントが、髪の毛で塵を拭き取るようにクードルーンに命じるところは次のように物語られている。

それから、王妃は、クードルーンがいる所へ行き、
このヘゲリンゲンの王女に言う、
「美しい娘よ、もし、あなたに考えなおす気がないなら、
腰掛けや長椅子の塵を、その髪で拭き取ってもらいましょう。

はっきり言っておきます。あなたは私のいくつもの部屋を、
怠ることなく毎日三度、きれいに掃除しなければなりません。
毎朝、部屋の暖炉に火をつけるのも、あなたの仕事です」
この王女は言う、「好きでもない人を愛するよりはましです」

この気高い王女は、王妃の言いつけ通りにし、
仕事を怠けることは、けっしてなかった。
王女は異境での、この苦難の日々を七年間耐え忍ぶが、
そのあいだ、王家の娘として扱われたことはなかった (古賀 1996 S. 327)。

このように、グリム兄弟は「灰かぶり」(KHM 021) の継姉たちの意地悪の中に、王妃ゲールリントによるクードルーンに対する仕打ちを連想していたのである。

3. 『パルチヴァール』

次に『パルチヴァール』(1210 年頃成立) を取り上げたい。これは、ハルトマン・フォン・アウエ、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルクとともに中世の三大叙事詩人と称されている、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハによる作品である。その『パルチヴァール』の中に、グリム兄弟は「ねずの木の話」(KHM 047) との関連を見出していた。

> 冒頭で、母親が指を切るところは、白雪姫とパルチヴァールの注目すべき箇所を連想させる。このことは、『古いドイツの森』(Altd. Wälder 1, 1-30) でも説明した (Grimm 1994 Bd. 3 S. 91)。

「ねずの木の話」の冒頭で、妻は、ねずの木の下でりんごの皮をむく際に指を切ってしまい、血が雪の上にしたたる。それを見て「血のように赤く、雪のように白い子が欲しい」と願うのである。これは「白雪姫」(KHM 053) の冒頭でも同様なのだが[1]、この場面にグリム兄弟は、『パルチヴァール』のとある箇所を思い浮かべたのである。その箇所には、ヤーコプも注目しており、『古いドイツの森』[2]というグリム兄弟が発行した雑誌の第 1 巻に、ヤーコプは「エッシェンバッハのパルチヴァールの一箇所に関する注釈」(Grimm 1999 S. 2f.) という題の論文を発表している。その論文の冒頭に引用されているのが、「アルトゥースの宮廷におけるパルチヴァール」(第 6 巻) の以下の場面である。

> アルトゥースの鷹はずっと一緒に飛んでいた。するとそこには千羽ほどのがちょうがいて、がああとたいへんな声だった。鷹はがちょうの群に襲いかかり、その一羽を激しく打った。がちょうは辛うじて倒木の枝の下へ逃げ込んで、もはや高く跳び上がれなかった。**傷口から雪の上に三滴の赤い血が落ちた。**これがパルチヴァールに苦しみを与えたのである。それは彼の誠実[1]によるものであった。真白な雪の上に血の滴りを見たとき、彼は考えた、「誰がこんなきれいな色を作られたのだろう。コンドヴィーラームールスよ、確かにこの色はお前に似ている。ここでお前に似たものを見つけたというのは、神は私の幸いを豊かにしてくださるおつもりなんだな。神のみ手と神の造られたすべてのものに栄光のあらんことを。コンドヴィーラームールスよ、ここにお前の姿が見える。雪の白さが血で映え、血が雪を赤く染めている。コンドヴィー

---

[1] 「白雪姫」(KHM 053) では、冬のある日、妃が窓のそばで縫い物をしている時に、針に指を刺してしまい、雪の上に 3 滴の血が落ちる。それを見てこの妃も「雪のように白く、血のように赤く、窓枠の木のように黒い子が欲しい」と思っている (Grimm 1980 Bd. 1 S. 269)。

[2] グリム兄弟が自費出版で刊行した個人雑誌である。第 1 巻は 1813 年にカッセルで刊行されたが、購読者不足のため、全 3 号で廃刊となった。雑誌の中身はほとんどがグリム兄弟自身による寄稿である。ヴィルヘルムはこの雑誌に掲載した論文を拡充して『ドイツ英雄伝説』(1829 年) を著した。

ラームールスよ、美しいお前の体はこれにそっくりだ。これは間違いなくお前だ。」**勇士の眼は、雪の上に落ちた血の様子から、二滴の血に妻の頬を、三滴目の血に妻のおとがいを思い浮かべた。**彼は心に妻への真実のミンネを変わることなく抱き続けていた。彼はすっかり思いに耽って、意識を失った。激しいミンネに捕らえられたのだ (エッシェンバハ 1974 (加倉井他訳) S. 149)。

このように、パルチヴァールは、雪の上に落ちた3滴の鷲鳥の血を見て妻のコンドヴィーラームールスのことを思い出し、我を忘れてしまう。ところがこれを見たガーヴァーン[2]が次のような方法でパルチヴァールを助ける。

わがガーヴァーン殿は考えた、「多分この男もあのときの私のように、ミンネにすっかり征服されたのかも知れぬ。誠実な思いがミンネに勝利を許さざるをえなかったのだろう。」彼はヴァーレイスの勇士の視線を窺い、その目がどこに向いているかを確かめると、黄色いタフタの裏地を付けた、ズリーンの布製のマントを、さっと血痕の上へ覆いかぶせた。マントが雪の上の血痕を覆ってそれが見えなくなると、ペルラペイレの女王[3]はパルチヴァールにふたたび意識を返した (エッシェンバハ 1974 (加倉井他訳) S. 158)。

こうして、ガーヴァーンがマントで血痕を覆うことで、彼を我に返らせている。このように、雪の上にしたたる血、というだけの一致点しかないように思えるが、グリム兄弟はこれを「ねずの木の話」(KHM 047) だけでなく「白雪姫」(KHM 053) とも関連付けているのである。

ヤーコプは『古いドイツの森』に載せた上記の論文の中で、雪の白と血の赤に黒を加え、古フランスや古イングランドの文献、シェイクスピア、『オシアン』、イタリアの『ペンタメローネ』、北欧の『エッダ』、インド神話などから膨大な引用をし、それら全てを関連づけているのである。例えば、インド神話では、ブラフマー[4]が赤、白、黒で表されている (Grimm 1999 S. 1ff.)、といった具合である (グリム兄弟がなぜインド神話も含めて指摘しているのかについては、後に第2章で言及する)。

これまでの考察からも分かるように、グリム兄弟は『昔話集 注釈篇』(第3巻) の中で、時折り大胆とも思えるほど自由に、昔話を神話やドイツに限らない古い文学と結びつけている。そしてこうしたグリム兄弟の方法は、昔話に限らなかったのである。言葉の語源に対する考察の場合も同様であった[5]。それに対して A. W. シュレーゲル (August Wilhelm

---

[1] 訳者注によれば、「妻への変わらぬ愛」のことである。
[2] ガーヴァーンは円卓の騎士のひとりで、この物語の副主人公である。彼は、ノルウェーのロート王の息子で、アルトゥース王の甥にあたる。
[3] コンドヴィーラームールスのこと (エッシェンバハ 1974 (加倉井他訳) S. 158)。
[4] ヒンドゥー教の主神の一人で、天と地を創った創造神とされる。
[5] 例えば、ヤーコプは『古いドイツの森』に載せた「花と葉の意味」という論文の中に、ドイツ語とラテン語の言葉を、あたかも語源的な関係があるかのように並べて見せている。これに

Schlegel, 1767-1845) は鋭い批判を行なっている (谷口 1985 S. 47f.)。つまり、あらゆるものを簡単に並置してしまうグリム兄弟のこのやり方が、時に「恣意的」、「実証されていない」、「空虚で」、「無益」だ、と言うのだ (Schlegel 1971 S. 392)。そして A. W. シュレーゲルは「同じものが他の民族や別の時代にも現れているからといって、グリム氏は、個々の比喩やシンボルにまでも、伝説や神話の概念を当てはめてしまっている」と批判する。A. W. シュレーゲルの考えでは、そうした類似の現象は、肉体的にも精神的にも似たものを有した人間が、同様の想像力から同様のものを生みだしただけで、それは人々が似たような夢を見るのと同様なのである (Schlegel 1971 S. 391f.)。

こうした A. W. シュレーゲルの捉え方は、現在の昔話研究でいえば、多元発生説に相当するものである。つまり原始的な考え方や空想は多くの民族において非常に似かよっているため、さまざまな地域で類似の昔話が独自に発生した、とする説である。グリム兄弟は、そうした多元的な発生の可能性も考慮し言及してはいるが、基本的には、第 2 章で言及することになる範囲での共通の源を想定し、種々の地域にわたる昔話の一致は共通の源に基づくと考えていたのである。

これまで本論で取り上げてきたグリム兄弟の指摘には、シュレーゲルによる批判も無理はないと思われるものもある。しかしそれらが、グリム兄弟によっても「実証はされていない」ものであるにしても、グリム兄弟のそうした昔話の捉え方が『昔話集』の編纂に少なからず影響していることは間違いないだろう。そのため、本論ではさらに時代を下って詳しく見ていくことにしたい。

がちょう番の娘（ゲッティンゲン）

対して風間は、「論証がないのでグリムの真意がわからない」と評している (風間 1985 S. 114)。

第3節　16世紀の文学とのつながり

もっと完全で、内容も豊かな本は、ドイツでは15世紀もしくは16世紀のハンス・ザックスやフィシャルトの時代においてなら可能だったことでしょう（『昔話集』第2版序文, Grimm 1980 Bd. 1 S. 18f.)。

「ザックス広場」のハンス・ザックス像
（ニュルンベルク）

グリム兄弟は、自分たちが集めた昔話がどのくらい古いものであるのかということに関しては、『昔話集』初版第1巻の序文で次のように述べている。

> 昔話が時の流れの中で絶えず新しく生まれ変わっていくのも確かです。それゆえ、昔話の根もとても古いものであるはずです。いくつかの昔話は、**フィッシャルトやロレンハーゲン**の話に痕跡があるため、およそ **300 年は古いものであることが証明されます**。このことは、それぞれ (該当する昔話) の注釈に指摘してあります。また**痕跡が少ないため、直接の証拠を挙げることは不可能ですが、昔話がそれよりもずっと古いものであることは、疑いようがありません**。それでも、昔話と偉大な英雄叙事詩や土地固有の動物寓話とのつながりが、ひとつの確かな**証拠**となっているのです。しかしもちろん、ここはそのことを取り上げる場ではないので、それも同様に注釈に記しておきました (Grimm 1986 Bd. 1 S. XIIIf.)。

つまりグリム兄弟は、自分たちが集めた昔話が実際に存在したことへの直接の証拠が16世紀の書物の中にあるとしているのだが、本節ではそれらの書物を考察していく。

1. フィッシャルト

上記序文の中でグリム兄弟が名指しているフィッシャルト (Johann Fischart, 1546-90 年) は、シュトラースブルク (現ストラスブール) 生まれの人文学者である。フィッシャルトは、当時の一流の教育を受けており、多数の言葉を解し、多くの学問領域にも通じた博識家だった。大学で法学を修め、1581 年には弁護士となり、後にはザールブリュッケンからさほど遠くないところで法務官を務めた。彼はカルヴァン主義者で、カトリックに対立し、政治的・宗派的闘争にも積極的にかかわっていた。フィッシャルトの代表作には、ラブレーの『ガルガンチュア』を翻案した『奇想天外な物語 (ガルガンチュア戯史)』(1575 年)、『韻文オイレンシュピーゲル』(1572 年)、『蚤退治』(1573 年) などがある[1]。

グリム兄弟は幾つかの昔話の注釈でフィッシャルトに言及しているのだが、ここでは「勇敢なちびの仕立て屋」(KHM 020) を見てみたい。

この昔話では、ちびの仕立て屋が購入したジャムを脇に置いておくと、蝿が寄ってくる。追い払っても埒があかないため、ぼろきれで蝿を叩いたところ、一撃で7匹の蝿を殺していた。ちびの仕立て屋は自らの「勇ましさ」を嬉しく思い、これを衆人に知らしめるために帯を作り、そこに「ひと打ちで7つ」という文字を刺繍し、世の中に出て行くのである。

グリム兄弟は、「勇敢なちびの仕立て屋」の注釈の中で、『蚤退治』と『奇想天外な物語 (ガルガンチュア戯史)』の中にこの話の存在を裏付けるような記述があると指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 42)。ここでは『蚤退治』の該当部分を見てみよう。

『蚤退治』の蚤は、自分の身を危険に置くことなく吸うことの出来る怠惰な女中の血に

---

[1] フィッシャルトの作品には「同時代人の愚行や悪徳を暴いて、これを教化し、改善しようとする意図がみられる。しかも彼はそれをユーモアと風刺、すなわち笑いによって達成しようと」しているという (フィッシャルト 1998 S. 300f.)。

は飽きてしまい、若い娘の血を吸おうとする。ところが娘の逆襲にあい、一族郎党皆殺しにされ、かろうじて一匹だけ生き残るのであった。命からがら逃げのびた蚤は、蚊に向かって自分がどのような酷い目にあったのかを語る。グリム兄弟が注釈において指摘しているのは、蚤の話を聞いた蚊が、今度は自分の苛酷な運命について蚤に語る場面である[1]。

また子供らは一本の針に三十匹の蚊を突き刺して、
ろうそくの火でじわじわと焼く、
あるいは我々の首の骨を折り、
盲のねずみ遊びをやって殺す。
そしてこんなことをするのは大人のように
ませた歌を歌う子供らだけではない、
男も女も、
もち竿や火酒、
その他の好餌で
我々にあらゆる無礼を働こうと精を出している。
坊主が払子で悪霊を払うように、
我々を蚊叩きで追う。
その蚊叩きには、一度に多くの蚊をしとめるため、
かならず巾広の皮片がつけてある。
一撃で三匹の蝿をたたき殺した
勇敢な仕立屋の丁稚の話を聞いているだろう。
そうなんだ、奴らは鳥をも差し向ける、
蚊喰鳥とか、四十雀などを (フィッシャルト 1998 (大澤他訳) S. 132)[2]。

この後に、でも一番恐ろしいのは女性だ、というユーモラスな記述が続く。

グリムの昔話では7匹、フィッシャルトでは3匹というように数は異なるものの、グリム兄弟はフィッシャルトのこの記述の中に、その当時、この仕立て屋の話が人々に知られていたことの証拠を見出したのであった。

2. ロレンハーゲン

初版の序文でグリム兄弟が名指ししていたロレンハーゲン (Georg Rollenhagen, 1542-1609年) も、フィッシャルトと同時代の人物である。

ロレンハーゲンはベルリン近郊で生まれ、後には聖職者となることが期待されていたため、ヴィッテンベルクやライプチヒで有名な説教師による説教を聞いていた。プレンツラウやマクデブルクのギムナジウムやヴィッテンベルク大学などで学んだ後、1567年にマクデブルクのギムナジウムの校長代理となる。1575年には同ギムナジウムの校長となり、こ

[1] グリムが注釈の中で引用しているのは、ゴシック部で示した二行のみである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 42.)。
[2] 翻訳は、フィッシャルト 1998 に拠る。原典では、Fischart 1982 S. 26f.

のギムナジウムの名を広く知らしめる。その後、他の町からの名誉ある招聘を受けるが、マクデブルクに留まる。彼の最も有名な文学作品が『蛙鼠合戦』(Froschmeuseler, 1595 年)[1]である。その他、著書の多くは、教育目的のために書かれたものが多い。そのひとつとして彼は、ホメロスの『イーリアス』をラテン語の翻訳付き選集として刊行している(Rollenhagen 1989 S. 721 ff.)。

『蛙鼠合戦』は、ホメロス作と考えられていた約 300 行の『蛙鼠合戦』(Batrachomyomachia)に取材し、鼠と蛙の戦いを描いたものであるが、その中には当時の新しい情報だけでなく、諺や昔話、さらには神話なども盛り込まれている (Killy 1988 Bd. 9 S. 508)。

さてグリム兄弟は、ロレンハーゲンの『蛙鼠合戦』の序文の中にも、自分たちの昔話の存在を暗示する言葉があると、注釈の中で指摘しているのだが、ここでその序文の該当する箇所を見てみよう。

> **高慢で嘲笑的な兄たちにさげすまれている敬虔なアッシェンペッセル** (Aschenpössel) **の昔話、愚かで怠惰なハインツの話、鉄のハインリヒの話、老ナイトハルトの話**[2]などの、すばらしい昔話こそが、古代ドイツ人にとって異教の教えとは何であったのかということを一番よく知らしめてくれる (Rollenhagen 1989 S. 22)。

グリム兄弟は、ここで指摘されている「高慢で嘲笑的な兄たちにさげすまれている敬虔なアッシェンペッセル (Aschenpössel) の昔話」が「灰かぶり (Aschenputtel)」(KHM 021)[3]のことであり、「愚かで怠惰なハインツの話」は「りこうなハンス」(KHM 032)、「鉄のハインリヒの話」は「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) のことであると見なしたのだ。そのことは、各話に付けられた注釈にも示されている。こうしてロレンハーゲンが言及していることが、それらの話が当時の人々に知られていたことの直接の証拠であると、グリム兄弟は考えたのである。

その他、『蛙鼠合戦』に収録されている話自体に言及している場合もある。例えば「ブレーメンの音楽隊」(KHM 027) の注釈で、グリム兄弟は、ロレンハーゲンの『蛙鼠合戦』の第 3 巻第 8 章[4]にこの昔話と同じ話が「雄牛とろばが、仲間とともに森の家に突進した話」として掲載されていると指摘し、その話を引用している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 60ff., Rollenhagen 1989 S. 544)。これは非常に長い話であり、またグリム兄弟の注釈に再録されて

---

[1] Rollenhagen 1989 は、編者の Dietmar Peil による 1608 年の新版の再版である。

[2] もともとは、バイエルン出身の詩人、ミンネゼンガーのこと。生没年は未詳。1210-40 年頃に詩作をしたと推定されている。ミンネザングのパロディーのようなものを書いた。14 世紀以降「ナイトハルト劇」(Neidhartspiel) という笑話 (Schwank) の主人公として、農民の敵役に仕立てられた。例えばハンス・ザックスは、『ナイトハルトと菫』(16 世紀) という笑劇を書いている (平凡社 『世界大百科事典』 第 21 巻)。

[3] 「灰かぶり」は女性のイメージが強いが、グリムは「灰かぶり」の注釈で、入手した類話には、灰かぶりが男性で男の兄弟から蔑まれる話もあることを記している。ロレンハーゲンがほのめかしている話もそのひとつである。また、グリムは、こうした男性版「灰かぶり」が KHM 136 と似ていること、また Zingerle の『昔話集』(Kinder= und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Zingerle. Insbruck 1852) にも男性が主人公の話が収録されていることを指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 48f.)。

[4] グリムは Cap 8 としているが、Rollenhagen 1989 版 (=1608 年版) では、第 9 章である。

いるため、ここでは引用しない。グリム兄弟は、このロレンハーゲンの話が「ブレーメンの音楽隊」のより完全な形であると見なしている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 66)。

3. ハンス・ザックス

『昔話集』第 2 版の序文に名指しされていたハンス・ザックス (Hans Sachs, 1494-1576 年) は、16 世紀のニュルンベルクの靴屋の親方で、同時に職匠歌人でもあり、210 篇もの喜劇・悲劇・謝肉祭劇を書いた人物である。とりわけその謝肉祭劇が名高い。彼は 1567 年の『わが詩作大全』という押韻詩の中で自分の著作の目録を作っているのだが、それによれば工匠歌 4275 篇、対韻詩 1700 篇 (戯曲作品およそ 200 篇を含む) など、全部で 6000 を超えており、非常に多作だったことが分かる (藤代 1988 S. 302)。

「背嚢と帽子と角ぶえ」(KHM 054) の注釈においてグリム兄弟は、「既にハンス・ザックスが非常に似た笑話を語っている」と指摘し、そのあらすじを紹介している (Grimm 1994 Bd. 3 102f.)。そこでこのふたつの話を比べてみることにする。

まずはグリム兄弟の「背嚢と帽子と角ぶえ」(KHM 054) がどのような話であるのかを見ておきたい。

3 人の兄弟が、運を試しに世の中に出ていく。長男は銀の山から銀を、次男は金の山から金を取って家に帰る。三男だけは、さらに運を試すため旅を続ける。三男は森の中で、**ごちそうを出すテーブルクロス**を見つける。その後、3 人の炭焼きから、**手で叩くと兵隊を出す背嚢、頭の上で回すと大砲を出す帽子、全てを破壊する角笛**を手に入れる。後に故郷に帰ると、兄たちは良い暮らしをしている。しかしみすぼらしい格好の三男は、弟と認めてもらえず、蔑まれる。それに怒りを覚えた三男は兵を出し、兄たちを痛めつける。それを知った王は、兵を出し、この男を追い払おうとするが、結局かなわず、逆に王女を妻に与える約束をさせられてしまう。王女は、何度かこの男を裏切ろうとしたため、男は怒り、角笛を吹いて全てを壊す。そうして王と王女は命を失う。

ザックスの「なぜ兵隊は太鼓の音に寄ってくるのか」も非常に長い話であるので、ここでは、要約して[1]その内容を比較してみよう。

ある兵隊が物乞いをしながら放浪していると、聖ペテロに会う。施しを乞うペテロに、兵隊は 3 ペニヒ与える。ペテロは、お礼として**望みが叶うさいころ**を授ける。次に男は、ろばに乗った農夫に出会う。この農夫は、ペテロを泊めたお礼にろばをもらっていた。それは、**尻尾を叩くと、兵隊を出すろば**であった。しかし、出てきた兵隊に馬や牛を奪い去られてしまったため、農夫はこのろばを手放したいと思っている。そこでふたりは、ろばとさいころを交換する。兵隊はすぐにろばから兵隊を呼び出し、さいころを奪い返す。そしてスウェーデンに向かう。なぜなら、炭・木・火を使わずにすばらしい晩餐を用意することが出来る者に、娘を与えるという布告をスウェーデン王が出していたからである。兵隊はさいころを使って、その課題を成し遂げる。ところが王は、兵隊に娘を与えようとしないため、兵隊はろばに乗って王女をさらう。王は兵を率いて追跡するが、男はろばから数百の歩兵部隊を出し、さいころを用いて壁を築く。恐れをなした王は、娘との結婚を認

[1] ハンス・ザックスの謝肉祭劇にはいくつかの邦訳があるが、笑話には邦訳がないようだ。ここでは Uther 1990 より要約する。

める。ろばはしかし病気になり、死んでしまう。そこで男は、ろばの皮をなめして太鼓にする。それを叩くと、兵隊たちが寄って来る。こういうわけで、今日でも、太鼓の轟を耳にすると、兵隊たちがすぐに寄ってくるのである (Uther 1990 S. 119ff.)。

このように、数々の点で両者は一致を示しており、グリム兄弟が非常に似ていると指摘している理由が分かる。

こうしてグリム兄弟は類似の話を見出しただけでなく、ザックスの話を『昔話集』に採用してもいた。例えば「焼かれて若くなった男」(KHM 147) は、ザックスの韻文の話をグリム兄弟が散文に訳したものである。グリム兄弟は古語を新高ドイツ語に書き改めてはいるが、内容的には、原典に忠実に訳している (Rölleke 1998 S. 564)[1]。

その他、「神様の獣と悪魔の獣」(KHM 148)、「エバの不揃いな子どもたち」(KHM 180) も同様にザックスを採用したものである。ザックスとグリム兄弟の『昔話集』に関しては、加藤 1998 に詳しい。

4. パウリ

パウリ (Johannes Pauli) はその生没年は未詳であるが、15 世紀中頃〜1519 年以降と推定されているアルザスのフランシスコ修道会士で、説教師として名声を博した人物である。彼は、一般の信徒や、修道院の中でも高位ではない人々のために、信仰心を高めつつも楽しく読むことが出来る本を作ろうとした。

『冗談とまじめ』(1522 年) はドイツ語では Predigtmärlein (説話) と呼ばれているものだが、ドイツ文学史上では Schwank (笑話) というジャンルに含まれる (パウリ 1999 S. 703ff.)。先に引用したザックスの「なぜ兵隊は太鼓の音に寄ってくるのか」も笑話であるが、とりわけ 16 世紀後半には散文の笑話集が次々と出版されたのであった。例えばフライの『園遊会』(1556 年)[2]や、キルヒホフの『気分を変えよう』(1563 年)[3]や、ヴィクラムの『乗合馬車』(1555 年) などがある。ヴィクラムについては次節で取り扱う。

さて「かしこいグレーテル」(KHM 077) の注釈において、パウリの『冗談とまじめ』の第 364 話との類似性が指摘されている。

グリム兄弟の「かしこいグレーテル」(KHM 077) では、料理人のグレーテルが、客のために鶏を二羽料理するよう申し付けられる。しかし鶏が焼けても客は到着しない。グレーテルは、鶏が焼けているかどうかを確認するため、「味見」をする。そしてもっともらしい理由を考えては、鶏を食べすすめ、ついには二羽とも平らげてしまう。そして主人が鶏を切り分けるための包丁を研いでいるところに、客が到着する。グレーテルは、主人はあなたの両耳を切り取るつもりで包丁を研いでいるから、逃げた方がよいと客に告げる。客はそれを信じて逃げる。その一方でグレーテルは主人に、客が鶏を持ち逃げしたと虚偽の報告をする。主人は包丁を手に、「ひとつだけでいい」と叫びながら、客を追いかける。主人は一羽返せという意味で言ったのだが、客は片方の耳をよこせと言っているのだと思い込み、必死で逃げる。

---

[1] Rölleke 1998 S. 206 以下に、ザックスによる話とグリムの昔話が並べて掲載されており、テクストを詳しく比較することが出来る。
[2] Jacob Frey: Gartengesellschaft 1556.
[3] Hans Wilhelm Kirchhoff: Wendunmuth 1563.

パウリの話 (第三百六十四話 冗談 料理女が二羽のローストチキンを平らげたこと) は、短ので全文転載する。

> 一人の主人がいて、料理女を一人かかえていました。その料理女はつまみ食いが好きでした。ある日曜に主人は一人の同僚を招待して、夕食をともにしようとしました。そこで主人は料理女に言いました。「鶏を二羽焼いてくれ。客を一人招待しているんだ。」さて鶏が焼けると、大変美味しそうな匂いがしたので、料理女は鶏を二羽とも食べてしまいました。その時客が台所に入って来ました。台所には戸口が二つありました。客は料理女に言いました。「ご主人はどこかね。」料理女は言いました。「あそこに立っておられるのがわからないのかね。ナイフを研いでお前さんの両耳を切り落とすつもりだよ。先週の今日もご主人は客の耳を二つとも切り落としたんだよ。」そこで客は逃げて行ってしまいました。
>
> 主人が台所に入って来て、言いました。「鶏をどこへやったのか。」料理女は言いました。「お客が持って行ってしまいました。あそこに走って行くのが見えませんか。」主人はナイフを手にもって追いかけて行って、ナイフを持った手で合図をして、叫びました。「私に一つだけくれ。」客はなおいっそう速く走りながら言いました。「お前さんには一つもやれない。」主人は客にローストチキンを一羽返させようと思い、客は主人に耳を一つ取られることになると思ったのでした。こうして下女は涼しい顔をしていられました。**女たちの悪知恵はここにも見られるでしょう** (パウリ 1999 (名古屋初期新高ドイツ語研究会訳) S. 370f.)。

このように、グリム兄弟の「かしこいグレーテル」(KHM 077) によく似た話であるが、パウリのテクストの最後に、教訓めいたひとことが付けられていることが特徴である (これらの教訓については、第Ⅲ部で考察する)。

さらにグリム兄弟は、「灰かぶり」(KHM 021) に付けた注釈の中で、次の話 (第三百三十三話 まじめ 「主の祈り」を唱えた女のこと) を取り上げている。

> 一人の女がおりました。女はいつも教会のうしろの席に跪いて祈り、**信心深いあまり涙を流していました。**一人の神聖な司教が上の二階席にいて、**鳩が来てその涙をついばんで飛び去る**のを見ました。司教はある時女のところへ行き、祈りながらあのように涙を流すとは、いったいなにを祈っているのかと尋ね、鳩のことも話しました。女は言いました。「私は『主の祈り』だけしか唱えられないのです。」司教は言いました。「もしあなたがその上に詩編を、その中にある美しい詩を唱えることができれば、もっと信心深くなるでしょうに。」女はそれを習い覚えました。しかし涙はもう出て来ようとはしませんでした。それで司教も鳩が飛んで来るのがもう見られないので、女に「主の祈り」をまた唱えなさいと言いました。**女がそれを唱えると、また涙が溢れ、鳩も飛んで来ました。**
>
> こういうわけで「主の祈り」はもっとも貴い、もっとも有益な、もっとも短い祈り

なのです。ですから、わがベギン会[1]修道女や若い未亡人はいつも食料袋の中に「主の祈り」を入れておかねばなりません。この人たちは食料袋は持っていますが、中にはスプーンとナイフと「主の祈り」を、と言ってもロザリオのことですが、入れているのです。ひょっとすると恋の便りも (パウリ 1999 (名古屋初期新高ドイツ語研究会訳) S. 344f.)。

このように、「灰かぶり」(KHM 021) とは一見何のかかわりもないと思われる話であるが、グリム兄弟は、灰の中にばらまかれたレンズ豆やエンドウ豆をより分ける際に灰かぶりを助ける鳩が、伝承に現れるこの鳩と同じ種のものだと見なしていたのである。そして、「灰かぶり」の注釈において、「鳩は無垢なものをより分ける (ついばみ集める) ということが、しばしば (伝承で) 語られている」ということの一例として、上記の話を取り上げたのであった (Grimm 1994 Bd. 3 S. 50)。

5. ヴィクラム

パウリに続いて笑話集を出版した人物にヴィクラム (Jörg Wickram, 1505 頃-62 年頃) がいる。1555 年に彼が刊行した笑話集の『乗合馬車』は、16 世紀に最も多く読まれた書物のひとつだという。

ヴィクラムはアルザスのコルマルで市長の庶子として誕生、市役所吏員となり、後にブライスガウのブルクハイム市の書記となった。市民道徳的教育小説の嚆矢と言われる『少年たちの鏡』(1554 年) などを著したが、そこでは勤勉さで成功する農夫の息子と、貴族の放蕩息子が対照的に描かれており、社会的傾向が顕著である (Martini 1972 S. 132)。『乗合馬車』においても、ヴィクラムは「裁判、宗教上の問題、子供の教育、結婚生活といった中層市民の日常の問題を取り上げ、人間の弱点を示しながら、当時の市民のとるべき道を示そうとしている」(パウリ 1999 S. 712)。

さて、グリム兄弟の昔話「天国の仕立て屋」(KHM 035) は、第 2 版より採用された話である。この話の出自に関してはグリム兄弟は注釈に、フライの『園遊会』(1556 年) とキルヒホフの『気分を変えよう』(1563 年) に拠る (Grimm 1994 Bd. 3 S. 76)[2]、そして同様の話がヴィクラムの『乗合馬車』の中にもあると紹介している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 76)。

グリム兄弟の「天国の仕立て屋」(KHM 035) は、神が留守の間に仕立て屋が天国にやってきて、ペテロに頼み込んで中に入れてもらう話である。この仕立て屋は、ペテロの言いつけを守らずに天国を見て回り、ある肘掛椅子に座る。そこに座ると、地上の出来事を全て見ることが出来るため、仕立て屋は、川で洗濯女がベールを 2 枚盗むのを目にする。仕立て屋はこれに腹を立て、足元にあった足台を女に向かって投げつける。

では次に、グリム兄弟が「あまり重要でない事柄が相違している」が同様の話であると指摘していたヴィクラムの話 (第 110 話 仕立屋が天国にやって来て、神様の足台を老婆に

---

[1] 「ベギン会とは主として女性が在俗のまま営む宗教団体のこと」である (阿部 1990 S. 400)。
[2] このグリムの話が、フライとヴィクラムのテクストにどれだけ依存しているかに関しては、小澤による詳しい考察がある (小澤 1992 S. 187ff.)。それによると、グリムは第 2 版の段階ではフライの話をベースにしていたのだが、第 4 版以降は概ねヴィクラムに従っている (小澤 1992 S. 190ff., Rölleke 1994 S. 457)。

向かって投げつけたこと) を見てみたい (Grimm 1994 Bd. 3 S. 76)。

ある晴れた日、神様が散歩をしようとお思いになり、使徒と聖者をみんな連れて行かれたので、天国には聖ペテロ以外には誰一人残っていませんでした。神様は聖ペテロに、自分が外出している間はよく気をつけて、誰も入れないようにと命じて、お出かけになりました。さて一人の仕立屋が天国の門の前にやって来て、門を叩きました。聖ペテロは、そこにいるのは誰か、なんの用かと尋ねました。仕立屋は言いました。「私は仕立屋で、ぜひ天国に入りたいのです。」聖ペテロは言いました。「誰も入れる訳にはいかん。神様がご不在だからな。神様はお出かけになるとき、自分の外出中は気をつけて、誰も入れないようにと私に命じられたのだ。」しかし仕立屋は聖ペテロにしつこく頼み続けたので、とうとう聖ペテロは仕立て屋が中に入ることを許してやりました。けれども仕立屋は、扉の後ろの隅に行儀よく静かに座って、神様が帰って来られても、仕立屋に気づいて、腹をお立てになることなどないようにという条件付きでした。仕立屋はそれを約束しました。

こうして仕立屋は扉の後ろの片隅に腰を下ろしました。しかし聖ペテロが扉の外へ出て行くやいなや、立ち上がって、天国を隅々までくまなく歩き回り、次々に見て回りました。最後に美しい高価な椅子がたくさんあるところにやって来ました。それらの椅子の中央に、すべて金でできた肘掛け椅子があって、それにはたくさんの高価な宝石がちりばめられていました。その椅子はほかの椅子よりもずっと背が高く、その前には金の足台もありました。神様がいらっしゃるときには、この肘掛け椅子に座っておられるのです。仕立屋はしばらく静かに椅子の前に立って、じっと眺めていました。というのはその椅子が、ほかのどれよりも一番気に入ったからです。それから仕立屋は、この肘掛け椅子に近づいて、腰を下ろしました。**座っている間仕立屋は下界を見下ろし、地上で起こっていることをすべて見ました。**とりわけ一人の老婆が隣の女から糸を一束盗むのを見つけました。仕立屋はこれに腹を立てて、金の足台を取って、老婆めがけて天国から地上に投げつけました。足台を投げてしまうと、仕立屋はゆっくり椅子からすべり下り、また扉の後ろの以前の場所に座って、どこにも行かなかったかのような顔をしていました。

さて神様は帰って来られたとき、仕立屋にはお気づきになりませんでした。けれども肘掛け椅子に座られると、足台がありません。それで神様は聖ペテロに、足台はどこに行ったのかとお尋ねになりました。聖ペテロは、存じませんと申し上げました。すると神様はさらにお尋ねになりました。「誰かここにいたのか。誰も入れなかったか。」聖ペテロは答えて、言いました。「中に入れましたのは、そこの扉の後ろに座っている仕立屋だけでございます。」それで神様は仕立屋に尋ねて、おっしゃいました。「お前は私の足台をどこへやったんだ。足台を見なかったか。」仕立屋は驚き、恐れおののきながら、答えて言いました。「私はあなた様の椅子に座り、下界で一人の老婆が、隣の女から糸を一束盗むのを見ました。それで腹が立って、老婆に向かって足台を投げつけました。」すると神様は仕立屋に立腹して、おっしゃいました。「ええい、とんでもない奴だ。お前がたくさんの端切れを切り取って、仕立て台の穴に押し込むたびに、お前に足台を投げつけていたら、天国には椅子も長椅子もなくなってしまう

だろう。」

こうして仕立屋は天国から追い出され、落ち度や失敗も暴かれて、明るみに出されたのです。**憂慮すべきことは、他人の悪事はほんのちょっとしたことでも非難し、とがめるくせに、自分はどっぷりとその中に漬かっている人が今でも大ぜい見かけられるということです** (ヴィクラム 2001 (名古屋初期新高ドイツ語研究会訳) S. 261ff.)。

前述の「かしこいグレーテル」(KHM 077) に相当するパウリの話と同様、最後に教訓めいたひとことが語られているのが特徴である。こういった昔話の中の教訓については、第Ⅲ部で扱う。さて、仕立て屋が天国で座る椅子に、グリム兄弟が連想していたのは次の神話である (同様の指摘が『神話学』にもある, J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 112f.)。

ここでの世界全体を見渡すことが出来る主の椅子 (Stuhl) は、フリズスキャールヴという名のオーディンの御座を想起させる。そこからオーディンは、地上で起こる全てのことを見届けるのである。また、他の人がその椅子に座ることもあり、『エッダ』ではフレイのことが語られている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 77)。

ここでも神話とのつながりが着目されていた。フリズスキャールヴとは、『エッダ』において次のように歌われている御座である。

フリズスキャールヴというところがそこにあって、オーディンは高座につくと、全世界を見霄(みはる)かし、人間一人一人の所業をごらんになって、すべてを記憶されるのだ (谷口 1973 S. 231)。

それからフレイの話というのは、次の話である。

ギュミルという男がいた。妻はアウルボザという。この女は山の巨人の出だ。二人の娘はゲルズといい、あらゆる女のうち最も美しい女だ。**ある日、フレイがフリズスキャールヴにいって全世界を打ち眺めた。**さて、北のほうに眼をやると、ある領地に大きくてきれいな家が眼に入った。この家のほうに一人の娘が歩いていって、手を上げてドアを開けた。すると、彼女の手から空中と水中に光がさして全世界がパッと輝いた。彼は**神聖な座についていた**という高慢の鼻をへし折られ、すっかりしょげて退出した。そして家に帰ると、ものもいわず、眠りもしなければ、飲物をとろうともせず、誰もあえてわけをきこうとしなかった (谷口 1973 S. 253)。

こうして神のフレイが御座のフリズスキャールヴから世界を見渡したところ美しい巨人の娘が目にとまり、激しく恋をしてしまうのである。グリム兄弟は、仕立て屋が座る神の御座の中に、フリズスキャールヴの名残りを見ていたのである。

第4節　民衆本とのつながり

『トリストラントとイザルデ』の民衆本については既に本章冒頭で言及したが、ここで民衆本に関してまとめて考察しておきたい。

「民衆本」という名は、1807年のゲレス (Johann Joseph von Görres, 1776-1848年)[1]の『ドイツ民衆本』(Die teutchen Volksbücher) に由来し、それが定着したものである[2]。

民衆本は、宗教改革と人文主義の時代の15-16世紀に廉価本として売られたもので、1455年の活字印刷術の発明により可能となった大量生産によるものであった。内容的には娯楽的なものが中心で、韻文で記されていた中世の文学と異なり、散文で書かれていた。

15世紀に刊行された民衆本には『麗わしのメルジーナ』(1474年)、『エルンスト公』(1476年)、『ポントゥスとシドニア』(1485年) がある。16世紀のものには『**フォルトゥナートゥス**』(1509年)、『オイレンシュピーゲル』(1510/11年)、『ファウスト博士』(1587年)、『**ラーレ人物語**』(1597年) があり、17世紀にも僅かながら、『さまよえるユダヤ人』(1602年)、『ハイモンの四人の子ら』(1604年) などが刊行された。最後の民衆本は、『不死身のジークフリート』(1727年) だという (藤代 1987 S. 299ff.)。

1. 『フォルトゥナートゥス』

「背嚢と帽子と角ぶえ」(KHM 054) へのグリム兄弟による注釈には、この昔話の「終結部には『フォルトゥナートゥス』[3]と似ているところがある」という指摘がなされている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 106)。

「背嚢と帽子と角ぶえ」は既に前節で取り上げた話である。森の中で、ごちそうを出すテーブルクロス、手で叩くと兵隊を出す背嚢、頭の上で回すと大砲を出す帽子、全てを破壊する角笛を手に入れた男の話であった。この話の最後では、男は冷酷な兄たちに復讐をするため、背嚢から兵を出し、兄たちを懲らしめる。それを知った王が兵を出し、男を追い払おうとするがかなわず、逆に王女を妻に与えることになってしまう。王女はそれが不服で、次のような行動に出る。

> 「夫の不思議な力は、きっと背嚢の中に隠されているのかもしれない」と考え、うわべを装って、夫を愛撫しました。そして夫のこころがやわらぐと、こう言いました。「あなた、あの嫌な背嚢をおろしてくださらない？あれのせいでみっともなくて、私は恥ずかしいわ。」夫はこう応えました。「おまえ、この背嚢は私の一番大切な宝物なんだ。これを持っている間は、私は世界中のどんな力も恐れることはないのだよ。」

---

[1] コブレンツの生れのドイツのジャーナリスト、学者。ハイデルベルク時代 (1806-08年) には、ブレンターノらと後期ロマン派のサークルを形成し、「隠者新聞」を刊行した。青年時代はフランス革命に熱狂するが、後に政治新聞「ライン・メルクール」(1814-16年) を刊行し、反ナポレオンを呼びかけた (Martini 1972 S. 341)。

[2] ロマン派の時代、民衆本は脚光を浴び、例えばティークは民衆本を集め、それに取材し改作した作品を発表している。『美しいマゲローネ』、『ハイモンの子らの物語』、『忠臣エッカルトとタンネンホイザー』は日本語にも翻訳されている (ティーク 1983所収)。

[3] 原題は『フォルトゥナートゥス』だが、邦題は『幸運のさいふと空とぶ帽子』(岡本 1988) である。

それから背嚢にどんな力があるのかを打ち明けました。そこで王女は、夫にキスをするようなふりをして、首に抱きついて、すばやく背嚢を夫の肩からとり、それを持って逃げ出しました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 283f.)。

こうして、王女は背嚢を叩いて兵を出し、夫を宮殿から追い出す。それにも負けずに夫は帽子を使い、大砲で反撃する。対する王女は再びこのように反応するのである。

王女は切々と頼んで、これからは改心すると約束したので、夫は説得されて王女と和睦しました。王女は夫に親切にし、とても愛しているようなふりをしました。しばらくすると夫をたぶらかすことに成功し、夫は、もし誰かが背嚢を手に入れたとしても、古い帽子がある限り、その人は自分には何もなすことはできないのだ、と打ち明けてしまいました。王女はこの秘密を知ると、夫が寝入るまで待って帽子を奪い、夫を路上へ放り出させてしまいました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 284)。

それでも男にはまだ角笛があった。そこで角笛を吹いて町中を破壊してしまい、王と娘も死んでしまう。これがグリム兄弟の「背嚢と帽子と角ぶえ」の終結部である。

では、グリム兄弟が指摘した民衆本の『フォルトゥナートゥス』はどのような話であろうか。

フォルトゥナートゥスは、父親が贅沢三昧をして財産を使い果たしてしまったので、故郷を捨てて、放浪の旅に出る。森で迷っているうちに、幸運の乙女に出会う。幸運の乙女は、叡智、富、権力、健康、美、長寿の6つの中からひとつを授けると言う。そこでフォルトゥナートゥスは富を選び、魔法の財布を手に入れる。それは、常に金貨が10枚入っている財布であった。この財布の力で、フォルトゥナートゥスは大富豪にのし上がる。そして故郷キプロスで貴族の妻を娶り、しばらくは落ち着いて暮らすが、また旅に出、サルタンから魔法の帽子を奪い取る。それは願った場所まで運んでくれる帽子であった。

フォルトゥナートゥスの死後、ふたつの宝は息子たちに受け継がれる。兄アンペードは帽子、弟アンドロージアは財布を取る。アンドロージアはイングランドに行き、絶世の美女、アグリピーナ王女に心を奪われる。そして自分の財産によって存在を誇示しようとしたため、王は金の出所を訝しく思う。そこで、王妃が娘に次のような計略を持ちかける。

「領地も領民もないのにいったいどこから莫大な財産を手に入れたのか、王さまもわたしも不思議でならないのよ。見たところそなたにぞっこん参っているようだから、今度来た時、二人きりでお話しできる時間をもっと作ってあげましょう。だからあの財産の源を聞きだしておくれ」アグリピーナ姫は、「やってみます」と答えました (岡本 1988 S. 171)。

そこで、アンドロージアとふたりきりになったアクリピーナ姫は、グリム兄弟の王女と同様にやさしくアンドロージアに言い寄るのである。

「アンドロージアさま、どうか本当のことをおっしゃってくださいまし。あなたさ

まの莫大なお金や財産の出所はどこでしょうか。もし嘘偽りなくおっしゃってくだされば、あなたさまに身も心も捧げますわ」(岡本 1988 S. 173)。

そこで、アンドロージアはうっかり財布の秘密を話してしまう。王女は、見返りとして、一夜をともにする約束までもする。しかし王女はそっくりな財布を作らせ、夜にアンドロージアがやって来ると眠り薬で寝入らせ、財布をすり替えるのである (岡本 1988 S. 174ff.)。

その後、騙されたことを知り絶望したアンドロージアは、偶然手に入れた不思議なりんごを用いて、王女に復讐を遂げる。そしてふたつの宝を取り戻し、王女を尼僧院に押し込めるのであった。

このようにして、王女が色仕掛けで男を騙すところ、そして最後には男が恨みを晴らすところをグリム兄弟は重ね合わせていたのである。

2. 『ラーレ人物語』

『ラーレ人物語』は、1597 年に匿名の作者によって刊行された民衆本である。翌年にはこれによく似た内容の『シルデの人々』が刊行された。前者を改作し、舞台をシルダという町に変えたものが後者だとする説もあれば、共通の原本をもとに両者が記されたとする説もある。

ラーレブルク村のラーレ人は、分別と知恵を買われて君主らに召し出されてしまう。男たちの不在に不便を感じた女性たちは、強く帰郷を望む。そのため、今後は召し出されることのないように、男たちは阿呆のふりを始める。例えば、砂糖が畑で育つのだから塩も同様だと考え、畑に塩を蒔く、といった具合である。ところが、いつしかその愚考が、茶番なのか本気なのか分からなくなっていくのである[1]。

さて、グリム兄弟は「3 人の幸せ者」(KHM 070) の注釈を次のように始めている。

> パーダーボルンより。これは明らかに、ラーレ人 (Lalenbürgern) の話と親縁関係にある。最後の猫の話は、ラーレ人の話において、非常にそっくりに語られている (第 44 章) (Grimm 1994 Bd. 3 S. 131)。

グリムの「3 人の幸せ者」では父親が死ぬ前に、長男には雄鶏、次男には大鎌、三男には猫を与える。そしてそれらが知られていない国を探し求めて幸せをつかむように言い遺す。三男は猫を知らない人々が住む島に行くのだが、これが上記の注釈でグリム兄弟が指摘している「最後の猫の話」である。この島には、鼠が数多く生息しており、人々を苦しめている。三男が連れてきた猫が鼠を捕まえるので、王は城の鼠を退治するために、猫を買い取る。しかし、島の人々は猫の鳴き声に驚き、恐れる。わけの分からない怪物に苦しめられるよりは、鼠の方がましだということで、猫を城から追い出そうとする。そして城を砲撃したので、城は崩れ落ちてしまうのである。

---

[1] この種の話は広く分布している。『世界の愚か村話』(日本民話の会・外国民話研究会 編訳) には、ドイツをはじめ、フランス、イタリア、ロシア、インド、中国などの類話が紹介されている。

グリム兄弟が非常に似ていると指摘している『ラーレ人物語』の第44章でも、ひとりの旅人が、猫をつれてラーレブルク村のラーレ人のところにやってくる。この猫が鼠を退治するのを見て、鼠に悩まされていたラーレ人は、それを100グルデンで買い取り、「ねずみ犬」と呼ぶのであった。旅人は、ラーレ人がこの取引を後悔することを恐れて早々に退散する。

> さて百姓たちは、ねずみ犬の食べ物のことをきくのを忘れていた。そこでそれをきくために、急いで一人の男に旅人のあとを追わせた。金を持った旅人は、誰かが追いかけて来るのを見て、ますます逃げ足を速めるので、男は追いつくことができず、遠くから呼びかけた。「あれの食い物は何だ、何を食うんだ」旅人は答えた。「やるものは何でも、やるものは何でも」百姓は旅人が「家畜でも人でも、家畜でも人でも」と言ったものと思い、ひどく驚いて引き返し、お偉方に報告した (大澤 1987 S. 183f.)。

このように聞き間違えてしまい、鼠の次には家畜を、そしてそれが尽きれば自分たち人間を食べるのだろうと考えて恐れをなす。そして城ごと猫を焼き殺すことに決める。ところが猫が逃げ出し、ある家に入りこむ。その家に火をつけたところ、そこから火が広まり、村全体が焼け落ちてしまうのであった (大澤 1987 S. 184)。

この話の場合には、このように非常に似ているため、グリム兄弟が両者の間に関連があると見なしたことも理解できる。